

---

# 黒羽の歩む道～inネギま！

鳳凰員 凶真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒羽の歩む道〜innネギま！

### 【Nコード】

N8777U

### 【作者名】

鳳凰員 凶真

### 【あらすじ】

現世でバラツバラの惨殺になった主人公 黒羽は神との対話を成す。だが実は黒羽が死んだのは予想外の出来事……。そこで神は黒羽に新しい人生を歩ませるのだった！ 執筆開始2011.7.

14

## 第一戦（前書き）

黒羽のネギまによるチート物語始まります！

実はこの作品は友達とともに考え始めたもので、今話の段階では何故か既に、魔法世界に突入しております

何故こうなったんだか……

それでは第一戦、どうぞ！

## 第一戦

そこは白い空間だった……

景色と呼べる景色は存在せず、人と呼べる人も存在しない

そこにあるのは俺　　貴嶋　黒羽という”存在”だけだった

存在　　つまり意識ははっきりしているのだが手や足などがある  
感じがない

ただそこに魂だけがあるような……。

『フオフオフオ。良く分かったの』

どこからともなく声が聞こえる

『ここは言わば三途の川のような場所じゃな』

三途の川ってあの生と死の境みたいな奴のことか？

『そうじゃな。人間の認識ではそうなっておるな』

人間の認識って……。まるでアンタは人間じゃないみたい言い方  
だな

『当たり前じゃ。俺は人間で言うところの神に当たる存在じゃ』

神ってあの神か……？

『そうじゃな』

存在したんだな神って……。まあいいやそれで何で俺はこんなことになってんですか？

魂だけの存在なので俺は喋る事が出来ない

まあ一応思うだけで通じてるみたいだからこれでいいけど

『神がいたから地球は出来上がったんじゃよ？じゃないとあんな偶然そうそう重ならないわい。それで今のお主の状況は……死んだ後じゃ』

やっぱりか……。まあ身体が無いのが証拠かな？

『そうじゃな現世ではもうバラツバラの惨殺じゃ』

何故言ったかとても疑問に感じます……。それで俺はこの後どうなるんですか？

『うーん』

どうしたんですか？

『実はな、お主の死は予期せぬ出来事だったのじゃ』

神って全てを管理してる訳じゃ無いんですか？

『それでもイレギュラーは必ず存在するんじゃよ。人間の意志は神

でも操れんのじゃ。それにそんな世界見てるこっちからしたら退屈じゃよ』

退屈って……

『まあそれはいいわい。で、どうなるかと言うと新しい人生を歩んでもらう事になる』

新しい人生……

『それに僕の計らいで特別に……特別に！アニメや漫画の世界でも良いようにしてやるわ。』

特別特別うるさいです。…漫画やアニメか……じゃあネギまでお願いします

『了解じゃ。新しい肉体の容姿と歳はどうするか？』

うーん……………じゃあまず髪の色は黒で容姿は上の上にしてください

あ、目の色も黒で

歳は……十歳ぐらいで

『こんな感じか？』

神がそう言つと、俺はなんだが変な感じになり、それが収まると俺の身体が出来上がっていた

身体に不備は一切ない

『さて次は、時代と能力じゃな』

「時代は赤き翼が出来る少し前をお願いします」

俺の声は十歳らしくまだ声変わりを知らない高音だった

『分かった。能力じゃが基本は何でもいいし、何個でもオーケーじゃ』

「分かりました。それじゃあ”大嘘憑き”、”暗器術”、”不老不死”、”錬金術”、”過負荷マイナスを作ったり譲渡出来る力”、”魔宝具生成”、後は能力じゃないけどエヴァが持つてる別荘一つ下さい。1日で一年位で任意で出ることの出来る奴をお願いします」

チートだつて？なにを言う自己防衛手段と言う奴だよ

『こりゃまあ随分とチートを……。だが一つ言っておくことがある』

「何ですか？」

『能力にあつた”過負荷を創造、譲渡出来る力”じゃが得るためには過負荷の地獄を味わう事になるぞ？人格が変わってしまうかもしれんし……』

「別にいいですよ。それをお願いします」

『そうか……では過負荷地獄巡りを始めるぞ』

突如、あらゆる痛みが俺を襲った

「side:神」

これは少しヤバいかもしれんの……

俺の目の前にいるイレギュラーは過負荷地獄を当てた直後から倒れたまんまでピクリとも動かない

たまに動くと思ったらビクビク痙攣するだけじゃからの

俺がそんな感じでイレギュラーを見ていると変化が起きた

『ほう髪が白く……』

段々と髪が白くなり始めた

そして完全に白くなるとイレギュラーは起き上がり、俺が授けた黒とは違う真っ赤な目でこちらを見た

「side:黒羽」

俺は気が付くと、そこは白い空間だった

あれ？デジャヴ？

『やっと目を醒ましよったか』

神の声が聞こえる

過負荷地獄巡りは成功したのか？

『成功はしたが……一つとんでもない過負荷が発現しよった』

「何ですかそれは？」

『一言で言うなれば”狂気”じゃな』

うどんげ？

『違うわ。お主の人格が過負荷地獄巡りに耐えられなくなり、もう一つ人格を作りそこに過負荷地獄巡りの全てをぶち込んだんじゃ』

「じゃあ俺って今は二重人格なんですか？」

『そうじゃな。他はなんの異常も無いから能力面もこれで終わりじや。オマケとして魔力の密度を最高に濃くして、身体能力を百倍、魔力と気を十倍にしておいたからの。後はがんばるんじゃぞ』

「はい」

俺がそう頷くと、俺の真下に穴がぽっかりと開いた

。

## 第一戦（後書き）

どうも鳳凰院 狂真です

と言っわけの第一戦でした

何故第一戦かと言うと、特に理由がありませんw

あるとすれば友達に『第一話とか第一章はありきたりすぎる』と言われたのですが、銀魂みたいに長いサブタイトルなど思い付かなかったのでこうなりました

さてとうとう始まる黒羽のチート無双、一体どうなるのか？

## 第二戦（前書き）

でわ書き上がった二話目を投稿いたします

二話目ではさっそくオリキャラが登場します

そして黒羽の人格が……

そんな感じの第二戦です！

## 第二戦

「只今絶賛紐無しバンジー経験中」

「うおおあああああああ！！！！！」

僕の叫びは空しく響き、身体は重力に従い落ちていく

「えーとどうしょ？」

このままでは地面に衝突してしまうので錬金術を使い、服をパラシユートに再構築する

「ふう危なかった」

スピードが緩まったので難なく着地

「まったく神様ももうちょい危険なく落としてくれないかなあ」

僕が着地したのはどっかの森の中

辺りを見回していると……

「誰かいるのか？」

男の声が聞こえてきた

「おーいここにいるよー…」

声を張り上げて自分のいる位置を教えようと　　数瞬遅れて、光の矢が三本こちらに突っ込んできた

「うわあっ!?!」咄嗟の事だったので一本直撃してしまった

「いたいなあ……………」

腕がグロテスクな事になっていたので大嘘憑きを使って傷を無かったことにする

その時、多分仕留めたと思った男が姿を現してくれた

男は僕をみると驚いた顔になった。面白…………w

「な、何故生きてるんだ!?!」

「さあ?何でだろう、ねっ!」

百倍の身体能力により一息で男を肉薄にする

勢いは殺さずにそのまま男の腹に蹴りを喰らわせる

「ぐあっ!?!」

男が吹っ飛ぶ。ネギまの世界って言うことは分かった。だから

「魔法の射手・火の二矢」

やってみた…………

僕の指先からは、魔法の射手ではなく魔力の塊が飛ばされた

魔力の塊は男の肩に命中し、男の右腕を吹っ飛ばした

「やっぱり出ないか」

まあ媒体とかもないし当然かもね

僕はまだ生きている男の元に向かい、ここは何処なのか聞くことにした

「で？ここは何処なの」

「ここはバルシムのアウテマだ」

バルシム？アウテマ？ナニソレ？

でも多分魔法世界……かな？

「ふーん。何で僕を襲ったの？」

「この研究所には誰も近付けてはならんかったからだ」

研究所ってあの目の前にあるデカイ建物のことかな？

ちよつと行つてみるかな……

「散々ペラペラ喋ってくれてありがとう。じゃあね」

手で銃の形を作り、指先に魔力を集めるイメージをして、次はそれを放つイメージ

「バーン」

銃を打つ真似をし、魔力の塊を飛ばす

魔力の塊は男の心臓に当たり、心臓に穴をあけた

初めて人を殺したけど、罪悪感、嫌悪感と言ったものは一切感じない  
やはり過負荷の性で僕は変わってしまったんだろうか？

「まあいいか」

男から恐らく媒体である指輪を自分の指に付け、研究所を目指して歩く

（研究所内）

なんか軽くグロかった

入っていった部屋ではなんか良く分からないバイオ溶液の中に意味不明な生物が浸かっていた

「というか誰もいない？」

あの男に騙された？いや騙す意味が無いし……うーん

そんなとき 何かを感じた

「？」

魔力のような……？

魔力のようなものを感じる部屋に入るが誰もいない

魔力のようなものを強く感じる位置に行くと、下に穴が開いた

また落ちるんだね……

底が見えてきたので、自慢の身体能力で綺麗に着地する

「ここは？」

刹那、俺は横に飛んだ

数瞬遅れて火、氷、闇、光といった魔法の射手が通り過ぎていった

「誰だい？」

僕は振り返り、使い慣れ始めた魔力をローブを着ている魔法使い達にぶつける

おお震えてる震えてる

「う、上にいた奴はどうした？」

どもりながらも四人いるうちの一人が話しかけてくる

「殺したよ」

僕はその質問に即座に答える

すると明らかに4人の雰囲気が変わった

「そうか……よくもっ！」

一人が声を荒げる

「魔法の射手・光の39矢」

39の光の矢がこちらに向かってくる

よし今度こそ……

「魔法の射手・火の2矢」

今度はちゃんと二本とも出た

僕はそれを互いにぶつけて爆発を起こす

目的は当然目くらましと相手の魔法の射手の誤爆

今の中に……

「 来れ 深淵の闇 燃え盛る大剣 闇と影と憎悪と破壊 復讐の  
大焰 我を焼け 彼を焼け 其はただ焼き尽くす者 奈落の業火”  
! ! !”

詠唱完了の直後、狭いこの通路で爆発が起きた

僕は自分にくる爆風やいろんな物を無かったことにする

爆発が収まると、瓦礫の下にはおびただしい血溜まりがあった

それをみても気持ち悪いとは思わない

どうやらホントに変わったらしい

今の音を聞きつけたのか、色んな研究員？がこちらを見ている

多分ヤバいことばかりしてる奴らなんだと僕は思う

数秒でこちらを見ていた研究員を即座に殺す

僕の服は返り血でもう真っ赤だ

「そうそうに切り上げなきゃね」

再び研究所内を歩いていると、デカイ扉を見つけた

「何か絶対あるよね」

扉をぶち壊し、辺りを見回すとこちらに背を向けてなにやら電子機器を操作している男が一人

その前ではデカイ箱に幾つもの機械がついている

「あまりその辺を壊さないでくれるかな」

男の声が辺りに響く

高くもなく低くもない声だった

「魔法の射手・火の21矢」

牽制のつもりで打ったけど全部男に当たる前に何かによって弾かれた

「無粋だな」

男がこちらを向く

む、なかなかの美形だな

「その後ろのものは何なの？」

「君みたいない小さい子が知ることじゃないさ」

望んでこの身体になったのになあ

「来れ 深淵の闇 燃え盛る大剣 闇と影と憎悪と破壊 復讐の  
大焔 我を焼け 彼を焼け 其はただ焼き尽くす者 奈落の業火”

「!!」

ドカァアアーン!

爆発音が響き渡り、辺りに煙が立ち込める

煙が晴れるとさっきと変わらない姿の男がいた

「やっぱり無粋だな」

「効くと思っただけどなあ」

でもネギまにはこんなキャラいなかったよな? 誰なんだ?

「名前はなんて言うの?」

「人に名前を聞くときは自分から名乗りな」

「うわぁお…かなりうざいね。僕の名前は貴嶋 黒羽」

「フーことは旧世界出身か……。俺の名前はリグレス・トルフィー  
ルだ」

「リグレス君か……うん覚えたよアグレス君!」

僕は聞いた名前を元気よく復唱した

「早速間違えんな!」魔法の射手・闇の83矢”」

うわぁ無粋だね(笑)

## 第二戦（後書き）

どうも鳳凰員 狂真です

という訳の第二戦でした！

黒羽は球磨川楔っぽくしたかったんですが出来ていたでしょうか？

そして登場したアグレス……いやリグレス君w

彼は一体何者なんでしょうか？

次は第三戦で……

感想や意見などを募集しております

### 第三戦（前書き）

今回はとうとうリグレス君と決着がつきます

そして箱が開く！？

でわ第三戦をどうぞ

### 第三戦

リグレス君の放ってきた83の魔法の射手を全て避けきる……のは当然無理でかなりの数を喰らったが痛みは無い

何故かという大嘘憑きで痛覚を無かったことにしているんだよ  
初めて右腕がグロテスクになったときにしといたんだ

まあ今も怪我は全て無かったことにしてるけど……

「お前も化け物なんだな」

リグレス君は僕を信じられないような目で見る

「お前も……っつて？」

僕がそう言つとリグレス君は後ろにあるあのデカイ箱を指差した

「これも化け物なんだよ」

リグレス君はそう言つと笑った

うーんどうしても何が入ってるか見てみたい

僕はその中に入ってるモノを隠しているデカイ箱を大嘘憑きにより無かったことにした

あれ？

「どうした？ 抜けたような面して」

何故に大嘘憑きが効かない……？

過負荷が効かないのかな？

「どうやらホントに化け物のようだね」

「まあコイツは特別だからな。さてここまで来たんだ、本格的に殺し合うか？」

「一方通行な虐殺で終了だと思うけどね」

「試してみなければ分からんだろうが！」 千の雷”！！”

ちよっ！？いきなり雷系最強の魔法を詠唱破棄ですか！？

僕は嘘憑きを使う暇もなく避けまくる

「まだ行くぞ！」 雷の斧”” 奈落の業火”！！”

「しかも連続？！」

避けきるのは普通に無理で左腕が吹っ飛んだ

「あちゃー」

「痛くないのか！？」

「んーまあね」

さてどうしようか。確か大嘘憑きは無かったことを無かったことは出来なかった筈だし……とか思ってたら腕が生えた

あ、不老不死って再生能力まで付いてたんだ

「真面目に化け物だな」

「そいつはどうも」魔法の射手・収束・火の99矢」

右手に火の魔力を纏わせる

「で、どうするんだ？」雷の暴風”！！」

魔力量とかどうなってるんだろっね？

とりあえず飛んできた雷の暴風を無かったことにしてリグレス君に突っ込む

「なっ！？くそっ……」

「逃がさないよ！」魔法の射手・拡散・火の29矢」

辺りに打ち、逃げ場を無くす

「終わりだね。」解放・名前はえーつと黒羽パンチ」

火の魔力を纏った僕のパンチはリグレス君の腹に当たりに逸らされ腹にアップパーをもらい吹っ飛んだ

らず横

「あれ？」

数メートル吹っ飛び僕は地面を転がった

「まだまだ甘いな」

「あそこは喰らうところですよ」

僕はケロツと起き上がる

「全然効いてないな」

「効いてるよ。ただその感覚がないだけ」

黒羽パンチが効かなかつたらリグレス君倒すの無理じゃない？

奈落の業火の詠唱待ってくれるほどアマくないだろうし

「そろそろ終いにするか」

リグレス君がそう言うのとリグレス君から多量の魔力が漏れたのが分かる

少しずつだけ魔法に慣れてきてはいるけどまだ全然だね

倒せるかな？

「千の雷”・奈落の業火”・解放固定・術式合成……」

多分僕消し飛ぶだろうな……

「煉獄雷撃」

しょうがないかな？

「終わ……！？」

リグレス君の動きがぴたりと止まった

何故かって？僕がリグレス君の左足の存在を無かったことにしたら……かなw

突如地面に倒れるリグレス君

左足は根元から無くなっていて血が吹き出ている

血肉や神経、骨まで丸見えだ

「な、何が？」

リグレス君が目に見えて狼狽えている

「僕的能力だよ」

「ホント化け物だな」

失礼だなあ何回も化け物なんて……

「聞いていいかなアグレス君？」

「リグレスな？何だよ」

「あれどうやってたら中身が見れるの？」

僕が指差すのはあのデカイ箱

「お前の能力じゃどうにも出来ないのか？」

「いやあ〜何回もやってるんだけどね」

何故が無効化されるし……

「うん何故が出来ないんだよねえ。どうなってるんだろっかね？」

「ふーん。ま、教えてやってもいいぜ。お前の事気に入ったしな」

「僕は虫は好かないんだけどね」

「何で今言った!？」

んー死にかけとは思えない元気さだね

というか失血死になんないのかな？

血だつて今でも吹き出しているし……

「まあいいや、でどうやるの？」

「簡単だ。あのデカイ箱を破壊するんだ」

破壊するの？

僕はとりあえず、とりあえずリグレス君の左足を止血した

「これで大丈夫だねアグレス君」

「お前ホントは俺のこと嫌いだろ」

「だから僕は虫は好かないんだって」

僕は頬を膨らませて拗ねたように言う

「お前もムカつくけどまずは可愛いと思う俺をシバきたい」

リグレス君の苦悩はとりあえずスルーして箱に近付く

壊せばいいんだよね？

「魔法の射手・収束・火の101矢」

さてご対面だね

「解放・すごい黒羽パンチ」

僕の右手が箱に触れ、箱が音を立てながら崩れ落ちた

### 第三戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳の第三戦でした

最後は呆気なかったでしたね

そして過負荷を無効化する箱の中身……一体何が入ってるんでしょうか？

そしてさらに友人に借りたソフトを無くしてしまいその事を友人に言えない作者

どうなるんでしょうかw

次は第四戦です

感想意見をドンドン募集しております

## 第四戦（前書き）

第四戦書き上がりました！

今回は衝撃の展開です

箱の中身の正体は？

てな感じの第四戦をどうぞ

## 第四戦

崩れ落ちた箱の中にあっただのは一人の少女だった

「あら？リグレス君これが君の言ってた化け物なの？」

綺麗な蒼い髪に翠の目

年齢は見た目で中学生位かな？

「箱の中身までは知らなかったがな」

「・・・・・・・・」

箱の中にいた子は何も喋らず唯こっちをジッとみてる

「やあ」

スマイルで話しかけてもうんともすんとも言わない

僕は女の子に近づいていく

と、ここでやっと女の子が反応を示した

僕を警戒するように立ち上がり、魔力を当てられる

僕が更に近付いた刹那、女の子の前に魔法陣が構築され中心から僕目掛けて光が迸った（マスパ的な）

大嘘憑きは……やっぱり効かない

仕方なく横に避けるけど、光は曲がり僕を追尾してきた

「うそ？」

完全に油断していた僕に光が直撃した

僕はリグレス君が寝っ転がっているところ位まで吹っ飛ばされた

「どうしたんだ？」

「いやあの子化け物だよ。真面目にね」

僕はボロボロの体で立ち上がる

痛みはないけどさっきの一撃で体が一気に限界を迎えた……気がする

というか再生能力が発動しない？

「どうなってんの？あの子の攻撃」

「俺が知るか」

まさかあの子の攻撃で死んだら不死の能力が発動しないなんてこと無いよね？

「やべ、死ぬかも」

あの子の魔法陣は既に光っていていつでも撃ってこれるよね？

勝てる手段なくね？

大嘘憑き……無理だった

不老不死……発動しないっぽい

錬金術……防げる気がしない

魔宝具生成……したことない

暗器術……使えねえ

狂気……イミフ

過負荷作成……過負荷自体が効かない

詰んだなオワタ＼（＾．＾）ノ

そして無情にもマスパ的な光は撃ち出された

僕が次に目を覚ますと、そこは見たことのある白い空間だった

「あれ？」

『すまぬなイレギュラーよ。一つ手違いがあった』

神様の声？ていうか手違いって？

『あの世界のバランスを舐めておったわ』

「バランスって？」

『僕等が管理する世界には、許容量というのがある。あのネギまの世界の許容量は……そうじゃな分かりやすく言うと100だったんじゃない。だがイレギュラーの主はそのネギまの世界の許容量を越えてしまっていたんじゃない。許容量を越えた世界はその許容量を越えたモノを駆逐しようとする修正力に似たものが働くんじゃない。その力で許容量を越えたモノを駆逐しようとするものを僕等は”バランス”と呼んでおる。あの世界で言う蒼い髪の少女がバランスじゃ』

「ていうか神様ってミスばっかですねww」

『うっさいわい。で許容量を減らすためにチート能力を削ってもら  
『う』

「マジですか……。うーんじゃあ”不死”はいいです」

『いいのか？』

「はい、あと大嘘憑きに制限をかけますね」

『制限？』

「相手に作用するのは無しで」

『なるほどの。つまり相手の足を無かったことにしたり、存在を無かったことにしたり、視力を無かったことにしたりは出来なくするということでもいいのかの？』

「はい、変わりにいくら鍛えても限界がこないようにしてください」

『許容量ギリギリじゃな、了解じゃ。では今度こそ行って参れ』

また僕の真下に穴が開いた

「あでゅー」

こうして僕の三度目の人生が幕を開けた

## 第四戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳の第四戦でした

いやあなんて言うかこの話は友人の意見により急遽作り変えました

これはそもそも友人が『黒羽はチートだが最強ではいけない』ということらしく……黒羽に制限をかけました

まあコレでも友人は納得していませんでしたけど……ごり押ししました

まあそんな訳で急展開でした

ホントはあの子を黒羽の従者にしたかったのですが……

どうもすいませんでした

では次は第五戦です！

## 第五戦（前書き）

さあ〜て今回は第五戦です！

五千円GETと言っことでテンションが上がり、書いてしまいましたww

そして漸く原作介入し始めます

さてこの世界は黒羽によりどこまでねじ曲がるのでしょうか？

でわ第五戦です！どうぞ

## 第五戦

僕が目を覚ますとそこはどこかの家の中だった

そして僕の顔を覗き込んでいる赤毛の少年がいる

「おい爺！この子目、覚ましたぞ！」

「こらナギ誰が爺じゃ！ちゃんとスタン爺ちゃんとよべ！」

「ヤダね。爺は爺だろ！」

「なんじゃと〜！」

何故か僕そっちのけで喧嘩が始まっている

ていつかナギ？このちっちゃん子供がナギ？

「ねえ君？」

「う？何だ？」

「今何歳なの？」

「今は八歳だな」

てことは赤き翼まで後七年か……

「おおそうじゃった。お主大丈夫か？近くの森に倒れていたのじゃ

が……」

なんかこの人、神様と被るね

とりあえず話をあわせるかな？

「はいちょっと魔法の練習をしてて」

「やはり魔法使いじゃったか……小さいのに」

リグレス君とおんなじこと言うし……

「俺より小さいもんな！」

「一緒くらいだと思っけどね……」

「君、名前は？」

僕が名前を聞くとナギは笑顔で元気良く自分の名前を告げた

「俺は、ナギ・スプリングフィールドだ！よろしくな！」

「僕は貴嶋 黒羽よろしくねナギ君」

こうして僕の原作介入が始まった

「俺は……？」

「「アンタ誰？」」

真面目に誰ですか？

「泣いていい？」

「キモイから止める」

「クロハはどんな魔法が使えるんだ？」

とりあえずナギとは打ち解け始めたね

スタンさんは端っこでシクシク泣いてるけど……

「うーんとりあえず”魔法の射手”と”奈落の業火”かな？」

「”奈落の業火”？」

「炎系の呪文だよ」

「ほおその歳でもうそんな高位の魔法が使えるのか……ナギより出来がいいの」

いつの間にかスタンさんが復活していた

「ところで黒羽君。黒羽君はどこか行く宛があるのかの？」

「黒羽でいいですスタンさん。えーと特には無いですね」

「そうか。では黒羽、ここに住まんか？ナギの友達になってくれる

と嬉しいんじゃないが……」

「おおそれいいぞ爺！」

ナギの方をみると目がめっちゃキラキラしてる

「いいですよ僕は別に……」

「やったー！！」

ナギが目に見えて喜んでる

そんなに嬉しいかなあ？

「ところでなんでクロハはあんなところにいたんだ？」

……うーん困ったなあ

どうやって誤魔化そうか？

「ナギ、黒羽にも聞かれたくないことの二つや三つはあるって」

……！ナイスヘルプスタンさん！

「そうかまあいいや」

と、ここで会話は終了した

「それよりナギ！明日も魔法学校じゃろ。早く寝んか」

「分あったよ。クロハ一緒に寝ようぜ！」

そう言ってナギは僕の手を取り恐らく寝室に向かって走り出した

「クス、そうだね寝ようか」

あ、決めておこうかな？

僕のこの世界での存在価値

《仲間を大切に……》

よし、これにしよう

現在の黒羽の仲間

- ・ナギ・スプリングフィールド
- ・リグレスww

## 第五戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳の第五戦でした

まず接触したのはナギとスタンです

いやあそれにしてもナギとの相性がいい！

そしてスタンが軽く弄られています

そして黒羽の存在価値……これはナルトで言う忍道みたいなモノと  
いう認識をお願いします

そして次は第六戦です！

## 第六戦（前書き）

今回はキングダムゾンを混ぜながら、日常を書いてみました

それからナギが少しおかしな事に…… W W

では第六戦です。どうぞ！

## 第六戦

ナギ達と暮らし始めて早くも1ヶ月

「クロハ、早く来いよー!」

なんていうか……ナギの元気、ありすぎて困るね

今日は森の中で魔法の練習……らしい

「やっと着いたな。じゃあ始めようぜ!」

「そうしようか」

僕とナギは分かれて魔法の練習に入る

「えーつとじゃあまずは基礎からやるかな」

基礎っていうのはまず魔力を右手に集める、次に魔力をゆっくり動かしながら左手に移動させる

次は左足、次は右足といった風に体内を循環させる

これを十分ぐらいやると次は移動させる魔力の塊を二つに増やす

でこれも十分ぐらいやって最後に三つに増やして十分、これで基礎は終わり

次は肉体の強化

腕立て千回、腹筋千回、背筋千回

それから多少走り込むと時刻は昼になった

「ナギい〜どこにいるの〜」

僕がナギを呼ぶとナギが走ってきた

「どうしたんだ？」

「お昼ご飯にしようよ。僕が作ったんだぜ」

「おお食う食う。クロハの飯はうめえからな！」

というわけで二人並んでサンドイッチを食べる

綺麗に食べ終わると味の感想をナギに聞いてみた

「どう美味しかったかな？」

「ああ旨かったぜ！」

「やったね！」

やはり美味しいと言われると嬉しくなるものだ

ついつい笑顔になってしまう

「…………… / / /」

「ん？ナギどうかした？」

「何でもない！（男男男…… e t c）」

「じゃあ再開しよつか」

「あ、ああ」

その後の練習も何故かナギは上の空だった……と思う

それで暗くなるとナギと一緒に帰って僕は先にお風呂に入って、み  
んなでご飯食べてナギがお風呂に入って、ナギと寝る……と言っ  
のは嘘なんだけどね

ナギが寝た後、密かに起きて、別荘の中でいろいろやってたりする  
んだよ

多分まだ誰も気付いてないと思う

ていつか使ってたらかなり髪が伸びる

今はもう腰ぐらいまである

かなり鬱陶しく感じる

まあめんどくさいから切らないけどさ

取り敢えずまあこんな感じに生活してる

原作まではまだ遠いなあ」

とか思っけていても時が経つのは早い

あれから半年が経つ

「全く年が経つのは早いなあ」

「何か爺臭いぞクロハ？」

「そうかなあ？でもナギは全然背が伸びないよね」

「なに言っけてんだよ。かなり伸びてるぜ？」

ナギは僕の方をみて当たり前のように言う

「いや全然背が一緒ぐらいじゃないか」

僕は不老の筈だから、成長はしない

それでもナギと身長があまり変わらないってことはナギが伸びていない以外有り得ない

「そりゃそうだろ。普通にクロハも伸びてるぜ？」

え？ まさか神様、また間違えたんじゃ……

「何だよその顔、まるで自分は成長してないとか思っけてたのか？」

僕は呆けにとられながらも頷く

「んなわけねえだろ！クロハってたまに変なことというよな」

神様、ちゃんと不老にしてくれたんだらうか？

ん？不老……………ってまさか！？

老いはしないってだけで、つまり成長が完全に止まるまでは成長し続けるってことなのかな！？

だとしたら……………はぁこの身体になった意味ないじゃないか

はぁ新たな事実気付いた瞬間だったよ

## 第六戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第六戦でした

いきなりですが……ナギに危ないフラグが……！？

今後が楽しみです（いろんな意味で……）

そして黒羽にはまだ誰も（黒羽と神と作者以外）知らない重大な秘密があるのです！！（、・・・）キリッ

（伏線、伏線w）

今回は黒羽のキャラ紹介です

それでは第七戦で……

## 第七戦／キャラ紹介の巻（前書き）

では今回は予告したとおり黒羽の設定を書いてみました

いやぁそれにしても友人の脳内どうなってるんでしょうね？

オリジナルの魔法やら過負荷を考えさせたら出るわ、出るわ（笑）

それでは、第七戦。どうぞ

## 第七戦くキャラ紹介の巻

貴嶋 黒羽

身長……エヴァと同じくらい

髪……伸びすぎて長さで言えば自身の身長以上あるが普段は結って腰ぐらいにしてある

目の色……黒だがみんながすでに忘れかけている狂気モードになると赤になり髪は白くなる

性格……球磨川 楔つばいがそこまで病んでいない。言葉遣いも楔つばい（これらはすべて楔を意識してやっている）

魔力の総量……だいたい木乃香の二十倍にぐらいで魔力の密度が濃すぎる（これにより魔法の威力は完全にチート化しているがコントロールが難しくなっている）

得意な属性……闇、火、雷

魔法……大抵の魔法は詠唱破棄が可能になっている

決めゼリフ……ほら俺って神に愛されてるじゃん（笑）

目標……すがりつきたくなるような嘘を言うこと

ミステル・マギ  
従者……無し

次からはクロハが作ったオリジナルの魔法、魔宝具、過負荷です

## 魔法

闇の雨……闇属性の魔法の射手を空中に収束させ、一気に拡散させる広域懺滅魔法。一般の魔法使いが使用しても対した威力にはならない。だが魔力の密度が濃い（＝魔法の威力がとてつもない）黒羽だからこそ使える技

三位一体……闇、火、雷の魔力の塊を完全に融合させ、融合させた魔力の塊を閃光にして放つ技。二つでも出来るが威力はかなり落ちる

読者の皆さんもこんな魔法は？というのがあったら感想のところに書いてください。よほどチートじゃない限り出来るだけ使ってくださいとおもいます

## 魔宝具

### 溶刀・煉

刀身は約五千度の炎で作られており、刀ながら斬るという概念ではなく溶かすといった概念で作られている。所有者は溶刀の熱を感じない

### 秘刀・極

作られた概念は、ただ一つ

『存在を認識させない』

Fateのセイバーが持っているライジング・エアは見えないだけで実際には存在する

だが秘刀は触れることすら出来ない。刀どうしで鏝迫り合いする事も出来ない

敵の防御を完全無視し、斬ることが出来る刀

黒羽の作った魔宝具に真名解放というかばん解的な奴がある

過負荷

知り盗り（しりとり）

相手の考えていることや知識を盗む過負荷

圧倒的弱さ（オーバーウィーク）

黒羽を自分より圧倒的に弱いと誤認させる過負荷

こんな感じですかね？

これらについての意見はかなり欲しいので皆さんの意見を教えてください  
ださい

## 第七戦くキャラ紹介の巻く（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第七戦でした

狂気モード……忘れてませんでしたか？

それから髪の毛長さ、身長以上ってローラ（禁書）かよw

オリジナルの魔法やら過負荷やら魔宝具やらの意見は本文でも書いたように求めたいです

ではまた次回く

感想、意見募集しています（作者の励みや元気の源になります）

セイバーの件で間違いがありました

×ライジング・エア

インビジブル・エア

らしいです

教えて下さった鏡花水月さん、ありがとございました

## 第八戦（前書き）

京都に行こう！

……… っでことで第八戦では京都に行きます

それからナギ……… W

でわ第八戦！

## 第八戦

「決めた！俺旅に出る！！」

いきなりのナギの発言に僕とスタン爺ちゃんは目をぱちくりさせる

「な、何て？」

「何じゃとナギ？」

「だってこんなところでウダウダ基本魔法ばっかやってて強くなれるかよー！」

まあ一理あるよね

ネギだって飛び級で卒業してたけど覚えてた魔法十個も無かったし

「いやナギよ……」

「うっせえ！！俺は決めたんだよ。クロハも一緒に行こうぜ！」

僕も！？

……………別にいいか

「僕は別にいいよ」

「ええ！？黒羽まで！？？」



キングクリムゾン発動！！

「さて来ました京都です」

「誰に言っただクロハ？」

「何でもない！」

京都に来た……それは別にいい

で？ここはどこ？

いつの間にか竹林だか山だか分からないところにきてた

「あゝうざってえ！どうすんだクロハ？」

「取り敢えず戦おう」

そう僕達はその良く分からないところで妖魔？の類と戦っていたりするんだよね

「へっそうだな！」魔法の射手・光の57矢”」

ドッカーーン!!

ナギの魔法が炸裂して辺りの妖魔が吹っ飛んだ

ナギには偶に教えてあげてるから結構強くなってると思う

「秘刀・極」

名前を呼ぶと、手元に形なく、でも存在している刀が有るのが分かる

「おいおい坊主、何の真似だ」

妖魔の言葉は一切無視して切りかかる

目の前の妖魔に秘刀で一太刀いれ、すぐさま他の妖魔に狙いを定める

「坊主！斬る真似なんかしても俺は倒れプハアッ！」

斬る真似じゃないよ、斬ってるんだよ

「さーて次は、君にしようかな？」

僕は一匹の妖魔に狙いを定め、切りかかる

逆袈裟からの袈裟切り

「坊主そろそろ死んどけやあ!!」

多分だけど真後ろから狙われている

僕が振り向くと、棍棒を振り上げている鬼

瞬動で一気に距離を詰め、首を刈る

「僕を倒すなら、エヴァでも持ってきてもらおうか？」

勿論呪いなんかされていない正真正銘の真祖をね……

鬼はそのまま還っていった

僕はふとナギの方を見ると一匹の天狗？鬼？と善戦していた

ナギは魔法と身体強化を使って食らいついている

「ナギー助けは？」

「いらねえ！！！」

ナギは身体をこちらに向けずに言った

時々見える顔なんかめっちゃ生き活きしてるし……

「余所見して……」

「ウザいなあ……邪魔するなよ。」雨、雨、降れ、降れ、闇の雨

全てを破壊し、全てを壊せ 雨が降った後、そこには何も残らない  
闇の雨”」

僕の頭上で黒い塊が作られ、圧縮された闇属性の魔法の射手が詠唱



刹那、僕の目の前の妖魔が消し飛んだ

それと同時に僕は後ろに尻餅をついた

「大丈夫かつ!？」

必死の形相で僕に近付いてきたのは、多分詠春……？

「クロハ!？」

ナギも来てくれたみたいだね

力を入れて起き上がるけど、死に直面した僕の体は思うようには動いてくれなかった

フラついて詠春に倒れる

「君、悪いけど僕をどこか休めるところに連れて行ってくれないか？」

詠春は何やら考えている

ナギの顔を見ると、こちらを心配してくれながらも詠春を睨んでいる……何で？

「クロハ!俺が運んで……!」いきなりのことでナギは口を閉ざして目を見開き、僕は浮遊感にうろたえた

でも状況を客観的に見たらなんて事はない

詠春が黒羽をお姫様抱っこした

「え……ちよっ」

だが客観的にみれない僕は詠春の腕の中で小さくなってしまっ

しかもそんな状態をナギにガン見されるなど恥ずかしすぎる

「屈辱だ……／＼／」

誰にも聞こえないようにそう呟いた

「さ、行くぞ少年！」

「……あ、ああ」

妖魔の討伐は、他に任せたのかな？

どうでもいいことを考えながらあまり寝ていなかった僕の意識は闇  
の中に落ちていった……

## 第八戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第八戦でした！

時間を飛ばしているのは早く原作に行きたいという表れですので勘弁してください

それから詠春の婿入り？の件を詳しく知っている方は出来れば教えて頂ければ幸いです

さて内容ですが……ナギwwですかね

魔改造までは行かなくともフェイトを片手で相手出来るぐらいにはしたいと思います

後は、詠春をどうやって仲間に加えるかだけだ

では次は第九戦で！

## 第九戦（前書き）

今回は試作として視点の移動を試みました

案外難しいですね……

今回は伏線としていたクロハの秘密があっけなく明かされます

それでは、第九戦です！

## 第九戦

side:ナギ

クロハが死ぬところだった……

それをこの眼鏡は助けた

それは感謝してるけど、なんかムカつく

なんかこう、イライラしてくる

気になるのはそれだけじゃない

この眼鏡の正体と、あの死ぬところだったクロハの髪

黒じゃなくて白だった……

魔力にしてみてもなんか俺が使ってる魔力とは全然違った

………  
ああもう止めだ止め！！ウダウダ考えんのは性にあ  
わねえ！

「待て眼鏡！」

大分距離が離れている眼鏡に追いつくために足に力を入れた

side：エイシユン

とある山の山中で妖魔の出現を聞いたときは焦った

直ぐに出れる奴らを集めて様子を見に行ったら、子供が殺されかけてたからな

まあ何とか倒して、怪我が無いか確認はしたけど……無かったから一安心だ

でもどうやら死に直面して精神が不安定になっていた

立つことも出来ず、俺に寄りかかってきた

ん？この子は……西洋の魔法使いか？

ということはあるちの子も？

そのとき俺に寄りかかっていた子が休める場所に連れて行ってくと……連れて帰るか。あの人にはまた迷惑を掛けるな

足がフラつくらしいので、恥ずかしいとは思うがお姫様抱っこする事にした

家に帰り、事情を話して空き部屋に抱えていた子を寝かす

「君はどうする？」

「ここでクロハを看とく」

「分かった」

そう言って俺は部屋の襖を締め、その部屋から去った

side:クロハ

ん？ここは？

「知らないて……」

「クロハ起きたか！！」

何で最後まで言わせてくれないかな？

「怪我はないのか？」

「大丈夫みたいだね」

そう言うとナギは大きく息を吐いた

「心配してたの？」

「当たり前だ！」

辺りを見回すと、どうやらどこかの家らしい

詠春の家、かな？

そのとき、襖が開いた

「起きたようだな」

詠春だった……。

「助けてくれてありがとう。僕は賁嶋 黒羽、こっちは……」

「ナギ・スプリングフィールドだ！」

「俺は青山 詠春宜しく。まあもうじき近衛に変わるけどな」

まだ婿入りしてないんだ……

「それよりお前ら、まず風呂入ってこい。ドロドロだ」

「分かった」

「俺ちょっとトイレ行ってくるわ。えーしゅんトイレどこだ？」

「はぁ……こっちだ」

詠春はナギをそのまま連れて行った

「じゃあお風呂に入ろうかね」

僕もゆっくり動き始めた

えと？ここだよね？

まあお風呂っていうより大浴場だよねw

更衣室に入って、服を脱いで用意してくれたタオルを持って湯の中に体を浸ける

ついでに結っていた髪も解く

「ああ……………」

やっぱり風呂はいいね

一気に疲れが取れる感じになるよ

少し浸かった後、体を洗おうと思いつき湯から上がった時、ナギが入ってきた

「うわなんだここ！？ホントに風呂か？」

「僕もそうおもつよ、ナギ」

「だよなあ……………クロ……………ハ？」

ナギがこちらに視線を向けた刹那、固まる

恥ずかしい……………というかナギ？

成長が乏しいとはいえ、女の人の体をジロジロ見るべきじゃないと

思っただけど……

というか僕が女だって誰か知ってた？

……まあいいや

ナギは段々と顔が紅くなっていく

僕もなんだか恥ずかしくなってきた！これが羞恥心！？……なんか  
違う気がする／／／

取り敢えずもう一度湯に体を沈める

「な、なあ……？」

「何だい？／／／」

顔から熱が抜けない。紅くなったままだ

まったく過負荷ってマイナスの感情じゃないの？

ほとんどの感情がマイナスの筈なのに……何でこんな初々しい反応  
になっただの！？

「クロハって……”女”なのか？」

「そうだけど／／／」

何か性別変わってたんだよね



という訳で駆けつけた男の人には目潰しをさせてもらった

こんな大勢に見られたら恥ずかしすぎてこの世界ごと無かったことにしちゃいそうだよ

ナギは例外だけど……

取り敢えず体にバスタオル巻いて、風呂を出る

「はあ……髪とか全然洗えなかった」

また後でいつか……

置いてあった浴衣に着替えて風呂場を出た

## 第九戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第九戦でした

何と黒羽はおにゃのこだった……！？

まあ分かってた人もかなりいたと思いますw

次は恐らく麻帆良武道会まで行く”予定”です

では次戦は、第十戦です！

## 第十戦（前書き）

まずは読者の皆さんに謝りたいと思います

すいませんでしたあああああ！！！！！！！！！

えっと第九戦の後書きに次は麻帆良武道会まで行くと書いていました  
たが、私の文才の無さにより出来ませんでした

すいません……

では気を取り直して第十戦です！

## 第十戦

「えーしゅん！俺達と一緒に旅に出ねえか!？」

「どうしてこうなった……」

うん僕も知りたい

僕とナギが詠春のところに泊めてもらって一週間が経ったある日、冒頭にあるようにナギが言った

でも僕としては来てほしい……、というか来てもらわなくては困る

「いやナギ？いきなりそんなこと言われても……」

「僕は詠春には来てほしいんだけど……（赤き翼的な）」

僕がそう言つとナギは目を見開き驚いた顔になった

（クロハ!？ま……まさか……（詠春が好きなんじゃね的な?））

おお今度はorzみたいなポーズになった

「で詠春行けそう?」

取り敢えずナギは放置して詠春に聞いてみる

「むむ……聞いてみなければ分かん。俺の一存では決められないからな」

まあこんな感じで聞きに行っただけで、当然無理だった  
特に青山宗家の方の批判が強かったんだ

婿入り前の大事な体とかなんとか言ってたし

「そいつら消せば問題ない？」

「こらこら……なに言ってるんだ」

でも詠春には来てもらわないと赤き翼にならないしね

「じゃあ納得させればいいんだよね」

「えっ？？」

「場のセッティングは宜しくね詠春。行くよナギ」

「俺がやってもいいのか？」

「勿論」

「ちよっ、お前らまつ……」

詠春の叫び声が聞こえる前にナギと共に瞬動で移動する

詠春、後は頑張ってるねww

「ナギ！その程度かい！」

僕は瞬動を連続で使用し、ナギに近付き蹴り飛ばす

「ぐっ、くそ！」魔法の射手・雷”……」

「遅いよナギ」

ナギが吹っ飛んだ先に既に構えていた僕は、上から下に拳を振り下ろしてナギを下にぶっ飛ばす

「ぐあっ！」

「”奈落の業火”」

「えっ……：ちよっクロハ！？」

「”雷の斧”、”雷の暴風”、”闇の雨”」

「ギイヤアアアアア！！！！！！！！！！」

えっ？何をしてるかって？決まってるじゃないか。ナギの調き……もとい修行だよ

まあこの魔法球内は絶対死なないからナギ相手に新魔法の練習相手に使えるんだけどね

「し……死ぬ」

だから死なないってw

詠春が場をセッティングしてくれるまではここで時間つぶすしかないな

ナギはぐったりしちゃったし……

新過負荷か新魔宝具でも作ろうかな

王の財宝……みたいなのが欲しいよな

……

……

……

……

…

「出来た……」

作られた過負荷はあとがきに乗せときます

「おいナギー！黒羽ー！」

詠春が駆けてきた

「どうしたんだえーしゅん？」

「宗家の方がこちらが用意する相手を負かせたら行ってもいいって……」

「よし！じゃあナギ、軽く片付けてこい」

「おう！任せとけ！」

「ナギー勝てよー」

場所は変わって道場内

ナギは魔力の使用はオーケーで魔法もいらしい  
武器としては宗家の人が木刀、ナギは杖だね

あ、ついでに勝敗はどちらかが参ったというまでらしい

「それでは………始め！」

開始の合図と同時にナギが突っ込む

「うっしょー！」

鋭い蹴りが宗家の奴（長いから宗家で）を襲う

だが軽く避けられ正面から無防備な背後に回られる

ナギは勢いを殺さず、前へ転がり宗家の一撃を避けた

「危ねえ……”戦いの歌”」

白兵戦用の魔法だったっけな？

「今度はこちらから行くぞ！」

フツと宗家の体がブレると次の瞬間には既にナギの懐に入っていた

「なっ！？」

完璧な入りだね

ナギが反応出来ないのも無理ないよ

宗家は木刀の柄の部分でナギの腹を殴り、少し距離が開くと、突きの体制に入った

ナギはのけぞりながらも横に避けようとしますが、宗家の方が早い

「黒羽って強いのか？」

いきなり詠春が話しかけてきた

「僕？弱いよ」

「そうなのか……」

とか話してる間に戦況は変わってる

いつのまにかナギが圧してる

「オラオラオラー!!」

どっかの誰かもびっくりだ

拳打の連撃

宗家は……恐らくカウンターを狙ってるのかな

と考えながら見てると、ナギがほんの一瞬、息をついた

それだけでもう駄目だ

宗家は待ってました、といわんばかりにその一瞬をつく

「”神鳴流秘技・百花繚乱”!!」

「おうわあ!!!」

木刀だから大丈夫だろうけどそれでも神鳴流の秘技なんだからダメ  
ージはかなりあるだろうね

「ちきしよー、”雷……」

「させん!!」

宗家は再び瞬動でナギに近付き、木刀を振るう

「いや……あれは」

「どうしたんだ黒羽？」

「どうやら……」

木刀がナギに当たる瞬間、ナギの体がブレた

「なにっ!？」

「ナギの勝ちいー」

宗家の真後ろにはナギ  
回避不可能のゼロ距離

「”雷の斧”！」

勝負ありだね

「にしてもバグだよなナギって」

「何がだよクロハ？」

「だってあの完璧な瞬動を見ただけで出来るんだからバグ以外の何

者でもないよ」

「それはいえるな」

さあーて詠春を仲間に取り入れて目指す先は麻帆良だ！！

## 第十戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です！

という訳で第十戦でした

いやあ〜戦闘描写って難しいですね  
書いてて思いました

まあ何はともあれ無事に詠春を仲間に取り入れる事が出来ました！

では次戦は第十一戦です！

作中でクロハが作った過負荷

### ・陰之国

影にあらゆるものを仕舞い込む事が出来る

常に発動しており、影を操作する事も出来る

魔法なども仕舞い込む事が出来、遅延呪文よりもっぱら効率がいい

### 必殺技

全魔法一斉射出（フルオートマジックバレル「長いのでフルマ」）

自分の周りに影の魔法陣を展開し、仕舞い込んでいる魔法を毎秒十発でぶっ放す

仕舞い込んでいる魔法の数は軽く千を越える

時々、マスパや魔砲（白い悪魔的な）が出たりするのはご愛嬌

## 第十一戦（前書き）

すみません！かなり遅れての投稿になりました

宿題やら部活やら何やらで時間が作れなかったので……

さて、今回は麻帆良武道会まで行きます

多少といつかかなり無理矢理感が否めませんがご了承ください……

そして来ました！ガチバトル？

では第十一戦です、どうぞ



悶えてたナギもいつの間にか復活したし、麻帆良に来た目的でも言おうか

「簡単に言えば金稼ぎ」

「金稼ぎ？」

二人でハモるな。気持ち悪い

「そうだよ。ここ麻帆良で行われる麻帆良武道会の優勝賞金が一千万。ソイツを貰うんだよ」

「なる程、その上全員が全員の実力を把握すると……」

「眼鏡のくせに鋭いね！」

「眼鏡関係ねえ！」

とまあ色々話しながらも麻帆良祭が行われているところについた

人混みがウザい……僕昔から人混みとか苦手なんだよね

こんな光景みたらアレしなきゃいけないんだけど……

「フハハ、見る人がゴミのようだ！」

詠春に肩車されたバグリ始めたナギが言ったからもういいや……

ああ、テンションが下がる

「お、あれは！？えーしゅん、次はアレやろっぜ！」

麻帆良祭を回り始め、僕のテンションも何とか戻り始めたにしても……

「ナギ元気だなあ……」

詠春とハモるぐらいナギの元気がいい

「早く行こうぜ！」

まあナギはまだ十歳だったっけ？

年相応かな？

そんな事を考えながら僕はナギの後ろをついて行く

時間は経ち、今詠春がぬらりひょんと話してる

「あんな頭、有り得ないよね……」

ナギはまた遊びに行っちゃったから僕は1人寂しい

麻帆良武道会のエントリーはとっくに終わってるから暇だ



終わった終わった

え？殺したかって？殺さないよ？

精々複雑骨折程度だよ

さて明日は本戦か……

あ、ナギ達も当然予選通過したからね

と、来ました本戦！

え？飛ばしすぎ？いいんだよ細かいことは……

第一回戦

貴嶋 黒羽 v s 青山 詠春

.....何でこうなるかな？

「ははっいきなりだね」

とまあ悪態つきながらも詠春と一緒にリング？に上がる

互いに少し離れて、向き合う

詠春は木刀を持っており、それで戦うらしい

辺りを騒がせていた歓声はバグったバカ（ナギ）以外は止まる

と、次の瞬間僕は既に詠春を吹っ飛ばしていた

side：サンニンショウ

黒羽が詠春を吹っ飛ばして数瞬後、詠春は自分が吹っ飛んでいることに気付き空中で体制を立て直し着地した

「なーにが僕は弱いよ、だ。嘘つきやがって」

詠春は悪態つく

そして詠春はさっきの一撃で悟ってしまった

コイツには 黒羽には絶対勝てない……と

まあ黒羽の詠春では修行している時間が絶対的に違う

今はもう体の成長は止まった黒羽、別荘の使用時間は500年ほどの昔に越えている

対して詠春はたかだか十年から二十年の間、比べることすら出来ないゆえに嫌でも悟ってしまう

黒羽の武の境地を……究極とも言える境地を

「僕が嘘つき？僕は嘘憑きだよ」

黒羽が再び”詠春が知覚出来ないスピード”で動く

位置などは分からない

詠春は目を閉じ、集中する

突如黒羽が現れたのは詠春の後ろ

後は握った拳を詠春に振り下ろすだけ  ではなかった

いつの間にか詠春の木刀がこちらに迫っていた

それをガードするために振り下ろす拳を木刀に当てる

ドカッ！！

通常では拳と木刀がぶつかっただけではこんな音は出ない

そこはやはり拳と木刀、ともに気で強化しているからだろう

「何で分かったの詠春？」

黒羽は詠春から距離を取りながら詠春に尋ねる

「こういうのは嫌なんだけどな、黒羽から感じる嫌な感じで居場所  
が分かるんだ」

ああ、あのめだかボックスでいう人吉の過負荷対策的な奴だね、と  
黒羽は呟く

そして黒羽は再び消え、詠春に仕掛けるが詠春は全て防ぎきる

「うーんどうしよっかな？まさかくまーみたいに気配を無かったこ  
とになんかしたくないしね」

この詠春が感じている嫌な感じを消す方法はある

だがそれをするとなんともなく影が薄くなる

誰からも忘れられるような存在になってしまう

「何をぶつくさ言って、いるー！」

詠春の一振りですべて黒羽は思考の渦から戻ってくる

詠春の一撃を黒羽は頭を下げて避け、再び距離を開ける

「しょうがないね。こちらも武器を使わせてもらっよ」

詠春が気付くと、黒羽はいつの間にか手に木刀を持っていた

「黒羽って剣術も使えたのか？」

「当たり前だよ」

黒羽は木刀を二、三回振った後消える

「……………っ!？」

詠春の眼前には、既に木刀が迫っていた

それを木刀で必死にいなすが、早すぎる

黒羽の放つ一撃、一撃が詠春がやっと反応出来る速さになっており、  
反撃できる隙がない

そしてやがて……

「ぐあっ!?!」

詠春は一撃、二撃、三撃、見ただけでも三撃もらっている

「黒羽……………今俺に何撃当てた？」

黒羽は唇を動かし、自分が詠春に当てた数を呟く

「12だけど……………」

” 12 ” それは異常過ぎる

いくら剣術を究めて、極めて、究極<sup>きわ</sup>めても、出来る事じゃない

「どっやって……」

「悪いけどこれ以上は無理だね」

そこからの戦いは一方的過ぎた

詠春がいくら策を用いるうとも、畏を仕掛けようとも、全て剣撃の嵐が無に返す

「くっ……」ここまでか」

「まあかなり喰らわしたからね」

そして決着がついた……。

詠春が喰らったと思っている黒羽の剣撃、 154回

実際黒羽が詠春に喰らわした剣撃、 1006974回

つまり詠春は黒羽の1006974回殺せる剣撃の僅か少ししか見えていなかった。

## 第十一戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第十一戦でした

まあ何というか、やはり前半はめちゃくちゃでしたね

後半……というか戦闘場面を三人称にしてみました

いかがだったですか？

次は恐らくナギvs黒羽になるでしょう

それでは次戦は第十二戦です

## 第十二戦（前書き）

頑張った！今回は作者の中でかなり頑張った気がします！（駄文には変わりありませんが……）

そして麻帆良武道会しゅーりょーです！

恐らく次からは日常編というかギャグパートというか、そんな感じにグダグダになりながら魔法世界に行くと思います

では色々楽しいと思われる第十二戦、どうぞ！



ナギは直ぐに起き上がり、僕の死角に移動してきた

「おらぁ！」

「やっぱり完璧な瞬動だね……」

僕はしゃがみ、ナギはパンチを空振る

僕はそのままナギの足を払い、倒れたナギの腹に二撃、顔面に三撃加えた

ナギは吹っ飛び、僕はそれを追いかける

ナギが空中で体制を立て直すけど、そこで追いつき顔面にハイキック

また瞬動で追いつき、と少しの間フルボッコ

このまま終わるかなーと思ってたらナギが反撃してきた

僕のハイキックをガードし、そのまま足を掴み一本背負い

「おっと……危ない」

「油断しすぎた……クロハ」

僕が着地した瞬間、ナギが放った雷の暴風が直撃した

ていつかいつのまに雷の暴風を無詠唱で出来るようになったの？

side：サンニンショウ

ナギの放った無詠唱の雷の暴風は着地した瞬間の無防備な黒羽に直撃した

砂煙が舞い上がり、黒羽がいた辺りは見えなくなっていた

「ふうーやれやれ、ナギ……僕じゃなきゃ詠春でも死んでたよ今は……」

砂煙の中から黒羽の声がナギを諭すような声が聞こえてきた

そして砂煙が払われ中から出て来たのは、ナギの放った雷の暴風を球体にし手で受け止めている黒羽だった

「なっ……!?!」

ナギは少なくとも無傷ではないと考えていた

だが目の前の黒羽は傷一つ無かった

黒羽はそんなナギをよそに留めている雷の暴風を握り潰した

これはとある吸血鬼のオリジナル魔法である”闇の魔法”の完成形である太陰道だ

あらゆる魔法を自分の体に取り込む、という物であり開発した吸血鬼ですら想像の域で諦めていた

「たしか野菜が言うには”疾風迅雷”だったかな？」

それを黒羽は完成させていた

想像では終わらずに創造した

「ナギ行くよ」

「避けなきゃ」

「死ぬよ？」

再び黒羽の一方的過ぎる攻撃が始まった

「良く耐えたねナギ」

あれから数分 たった数分

それだけでナギは、片手を解放骨折、片足を複雑骨折、頭から多量の血を流していた

辺りは静まり返っており、誰一人声を発さない

ナギの荒い息づかいだけが聞こえていた

「ナギ？そんなもんじゃ僕のファーストキスは上げられないよ」

黒羽は拗ねた様子にいう

「く……」

ナギは動かない 否、動けない

何せ片足が複雑骨折しているのだ

だがナギは動き出す

一歩ずつ前へ、黒羽の元に

瞬間ナギが横に吹っ飛ぶ

「ナギ、そんなものなの？」

「やってやる！」

黒羽の問いにナギは即座に答える

「はああああ……」

ナギは立ち上がり、右手に魔力を集める

黒羽はそれを静観している

「ラストだ、クロハ」

ナギはクロハに瞬動で突っ込む

「はぁ最後はただのパンチか……まぁナギらしいね」

ナギの渾身の一撃を黒羽は

拳ごと握り潰した

辺りには骨が折れる音と、誰かが倒れる音、誰かが何かを呟く音が聞こえた

「オールブレイカー全てを壊す者」

side:クロハ

僕が優勝し賞金を貰った後、ナギの見舞いを見に行った

「ナギ？大丈夫？」

「ああクロハか……」

なんか声に覇気がない

やっぱり負けたのがショックだったのかな？

「元気ないね」

「負けちまったからな」

「そんなの当たり前じゃないか」

同情も何もしない

そんな事しても意味はない

「ナギは分かってたよね？僕に勝てないことぐらい」

ナギは俯き頷く

「じゃあ別に……」

「……………」

はあめんどくさいね

「ナギ・スプリングフィールド……」

ナギの名前を呼ぶと、ナギはこちらを向く

「えいつ！」

「ぶげらっ！」

思いっきりビンタした

「な、何だよクロハ！」

「ナギ……僕はね過負荷の塊なんだからこんなこと言わせないでくれ。僕のキャラがブレるだろ」

「過負荷？」

「そつだよ、あつただろ？僕がナギの傷を無かったことにしたことが」

大嘘憑きに制限がかかる前だけどね

「あああつたな、あれが過負荷なのか？」

「そつだよ、欠点にしかならない才能とことを言うんだ。………  
…そつだねリベンジだナギ、僕が持つてる過負荷の数を当てること  
が出来たらキスしてあげるよ」

「え〜、うーんと、100個ぐらいじゃねえか？」

「残念、僕が持つてる過負荷の数は、一万個　　じゃなかった無  
量大数だぜ」

まあでも天然の過負荷じゃないから、”加負荷”になるのかな？

「なっ………」

「つまり僕はあらゆる無能な欠点の塊なのさ」「てかぶつちやける  
とき、僕は”ナギが呼吸するよりも早くこの世界を無かったことに  
出来るんだぜ」

「で、それが何なんだよ」

ナギは頭を掻きながら眠そうな顔をしている

流石バカだね。僕がぶっちゃけでも何の反応も示さないなんて……

「まあいいや、結局何が言いたいかって言うと　、　」

僕はナギに近付き、　を重ねた

「元気出せ。そんなんじゃ僕、寂しいぞ／＼」

の部分は何だった？

言わせるなよ恥ずかしい。そうだな、ヒントは漢字一文字だ

「……………」

放心状態のナギを放置して僕は部屋を出た

手には、一枚のカードを握りながら　。

## 第十二戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第十二戦でした！

どうでしたか今回は？

ナギが雷の暴風を無詠唱……チートがさらにチートにW W

そしてそれをさらに潰す黒羽

解放骨折に複雑骨折で…… W W

よく動けたなナギ W

そして 黒羽がデレた！！

ナンテコツタイ…… 2人の関係はどうなるんだろうか？

次戦は第十三戦です！お楽しみに してる人いるかな？

感想待ってます

### 第十三戦（前書き）

今回と恐らくの次の話はナギと詠春の魔改造回です

改造ということのでギャグは少なめになると思います

それでは、第十三戦です！

## 第十三戦

これはとある一日のお話。

「詠春、ナギ、君らは弱い」

瞬間、2人の空気が絶対零度近くまで下がった気がした

「んだとクロハ？」

「そりゃ黒羽からしたら弱いだろうな」

僕は、別荘を取り出し部屋の真ん中においた

あ、僕らが今いるのは、イギリスの地名は良く分からないとこの宿屋ね

「だからこの中で一年間、僕がすっかり、みっちり、べつとり、ぬつちやり、ねつちやりと魔改……特訓してあげるよ」

僕が2人にそう言つと、ナギも詠春も迷いなく頷いた

と言つわけで別荘に「お〜！」

「そついやクロハの別荘に入るのは久し振りだな」

「俺は初めてだぞ？なんだここ？」

「2人ともコレ付けて」

僕は惚けている2人に腕輪を渡す

「その腕輪は一時的に体の成長を止める魔宝具だよ」

「なあ黒羽？ここって何なんだ？」

腕輪を付けた詠春が聞いてくる

あれ？そついいえば詠春は初めてだっけ？いや前に呼びにきたときに入ってきたような？まあいいか……

「ここはね1日が最大1年まで引き伸ばせる言わば異空間なんだよ。その上、気候や重力などは僕の思考で操作できるようにしてあるんだ」

「1日が1年！？それは……何というか反則臭いな」

まあねww

「さて始めようか、ナギ泳いでないで始めるよ」

「分かった」

「というか服も脱がずに泳いでたんだね」

「よし、まずはこれだね」

僕は暗器術の要領でどこからともなく指輪を2つ取り出す

「これを指に付けて」

僕に言われた通りに詠春は右手の人差し指に、ナギは知ってか知らずか左手の薬指に……

はめた瞬間2人の顔つきが変わる

「なんだコレ魔力が……!?!」

「なんだこの指輪……気が!?!」

その指輪ははめた人物の潜在的な、つまり魔力や気を最大値の十分の一に抑える、といったものだ

僕もコレの上位版、百分の一に抑えるのを二個付けてる

「取り敢えずそれはずっと付けててもらおうよ。じゃあ次は……」

僕はこの異空間における2人の重力を十倍にした

途端に地面へはりつく2人

「うおっ!？」

「ぐっ……黒羽どういつもりだ!！」

「まずはそこからだね。僕は休憩してるから立てるようにになったら起こしてよ」

そして2人を放置した僕は、木陰に行き、ナギたちを眺めながら眠りについた

side:ナギ

どうなってんだコレ!？

ピクリとも動かねえ……

逆に押しつぶされそうだ……!

詠春の方を見ると、何か一応体は起こして、膝をついた体制になっている

どうやって……

「案……外簡単だ、ぞ。自分の、ナ……ギなら魔力を常に、放出、す

れば……」

魔力を放出……？

こうか……？

…………… おお軽くなった

「バカナギ！一度に出し過ぎだ！！」

立てた、と思った次の瞬間、俺はまた地面にへばりついてた

そうか……少しずつ放出しなきゃ行けないのか……

案外難しいなコレ

s i d e : エイシユン

はっきり言ってかなりキツイ

でも黒羽は恐らくコレぐらい簡単に出来るんだろっ

だったら俺も……！

俺は少しずつ気の放出量を大きくしながら立ち上がっていく

ただでさえ気がこの指輪によって少なくなってるんだから気を付けないとな

それから数十分すると、俺は何とか一足歩行出来るようになった  
ナギはやっと立てるようになったぐらいだ

せめてナギが動けるようになるまでには走り回れるようにはなっておきたいな……

side:クロハ

「ふぁ……」

僕は自然にまどろみから目を覚ます

目の前には、走り回るナギと詠春

「全く立てるようになったら起こしに来てっていったのに」

僕は悪態つきながら2人の元に向かう

「お、目え覚ましたかクロハ」

「よく寝てたな」

「起こせっていったのに……まあいいや、で2人とも慣れた？」

僕がそう言うと、軽いスパーリングをして見せてくれた

「完璧だ！」

「そう、じゃあ次の段階だね。基礎の練習と自分の技磨き、それから僕が2人に技を教える、そして2人に覚えてもらう。これを一年かけてやってもらうよ。じゃあ強化合宿、始め！」

とか言い出してから1ヶ月

ナギと詠春はともかなり力を付けていった

訳はない

というかこの1ヶ月は基礎練しかしていない

継続は力なり……詠春は意味知ってるからいいけどナギに分からせるには苦労した

「さて、基礎練もかなりやったから次の工程、技の習得と技に磨きをかけること、だよ」

「やっとかよ、基礎ばっかで死ぬところだったぜ」

「だが基礎の面ではかなり力が付いたんじゃないか？」

「当たり前だよ詠春。そうだね……試してみようか詠春、今から一瞬だけ重力を戻すから夕凧を本気で振り抜いてごらん」  
「分かった」

詠春は鞘から夕凧を抜き、上段で構える

「……………今だ！」

「はあああ！！！！」

シユンと夕凧が縦に振り抜かれた刹那、地面が割れ、海が割れた

底が見えるほどに……

「……………」

「まあ今はこんなものだね」

指輪外したら、とんでもないことになりそうだね

「す、す、すげえぞえーしゅん！！俺もあんな感じになんのか、やべえ今すぐ試してえ！！」

「強化合宿が終わったら存分に試せばいいさ」

「さてじゃあナギから教えるよ、確かナギの得意属性は雷、風、光だったね」

「ああ」

「じゃあこんなもんかな？」

僕は手を前につきだし、光の魔力、風の魔力、雷の魔力を混ぜ合わせる

「クロハ、何を……！？」

「これは……？」

2人とも魔力には敏感だね

「これはね、”三位一体”という僕オリジナルの魔法だよ。感卦法という技があるのは2人とも知ってるよね？」

「ああ前にクロハが見してくれた気と魔力を合わせる奴だろ」

「そう、あれは反発しあうのを無理矢理混ぜ合わせる訳だ。だから当然完璧に出来たとしても出力は僕から言わせれば微妙だ。じゃあ魔力と魔力、反発しあわないモノ同士を混ぜ合わせたら？余計な力が入らずに純粋に出力が上がる……こんな感じにね」

完全に混ぜきった三種類の属性の魔力の塊をビーム状にして海に向かって発射する

閃光が迸り、辺りに轟音が響く

ビーチでやってるから風で石がめっちゃ飛んできて痛い……あ、痛くないんだっただ

「とまあこんな感じだね」

閃光が通った場所は恐らく原子すら消えているだろう

水は蒸発に、波で揺れまくりとんでもないことになっていた

「そしてこの三位一体の一番いい点は、いくらでも出力を上げることが出来る点だ。ナギにはこれを覚えてもらう。詠唱は必要ないから馬鹿でもオーケー」

「誰がバカだ！……いいぜ教えてくれクロハ。こんなすげえ魔法は初めてだ！！」

魔法っていうより魔砲なんだけどね

「ちょいまち、次は詠春だよ。順番は大切にね」

「あれは黒羽が考えたのか？」

「そうだよ。詠春の技も会得したらグロいからね」

さてさてどんな魔改造に仕上がるかな？

## 第十三戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第十三戦でした

まあ魔改造の話だからギャグが少なくなるのはしょうがないですかね

まあチート化するナギと詠春に乞うご期待！

感卦法に対する意見はオリジナルのモノです！

では次戦は第十四戦です！

## 第十四戦（前書き）

今回はガチのガチ、大真面目にガチバトルを書いてみました

その結果、少し長くなり、色々あやふやな説明や独自設定があったりします

それでは第十四戦、どうぞ

## 第十四戦

別荘の中でナギと詠春の修行を始めて早くも6ヶ月

この間に2人は三回ぐらい死んだ

まあそのぶんナギはちゃんと三位一体を覚えたり、詠春にも奥義を覚えさせた

今は僕が分身して分身体の方がナギを教える

でナギたちとは違い雪山にいるオリジナルの僕は詠春に教えてるんだけど……

「嫌………無理」

詠春がぶっ倒れてた

まあ詠春には重力五十倍の中で、両手両足に百キロの錘を付けて、瞬動させながら居合い抜きさせてるからね

「まあ詠春、ゆっくりでいいからね？バグなナギに抜かれても知らないけど……」

「アイツには負けん！」

僕が発破をかけると詠春は勢い良く起き上がる

にしても魔改造しすぎたかもしれないね

多分今の詠春だったら神鳴流抜きにしても爵位級の悪魔を片手間  
相手出来ると思う

「はあああ！！！！」

詠春が抜刀し、刀を横に薙ぐ

その剣圧で積もっている雪が吹き飛ば

「まだ遅いよ、斬空閃でこの雪を全部吹き飛ばさなきゃダメだよ」

「出来るかああああああ！！！！！！！！！！」

「それだけ叫べるならまだいけるね」

まあ枷を全部外して、神鳴流の決戦奥義使ったらこんな雪山吹き飛  
ぶと思うけどね

「うあ……………」

あ、詠春が死んだ

これで四回目だね

詠春が復活するまでお待ちください

「う……………あれ？」

「やっと起きたね」

目を覚ました（復活した）詠春は苦もなく上体を起こす

今の重力には慣れたみたいだからもう少し重力を増やそうかな

僕の修行において、慣れは必要ないからね

「また死んだのか？」

「そうだね、これで臨死体験四度目だよ。すごいね経験豊富だね」

「嬉しくないな。ていうかいつになったらその最終奥義の境地に行けるんだ？何だっけ”超神速の抜刀術”だったか？」

分かった人もいると思うが、まあぶっちゃけ飛天御剣流だ

でもその超神速に瞬動が入るから……

「神速じゃなくて”真速”の抜刀術だよ。魅せたよね？一回だけ」

まあ僕のは不可能な完成形　いや完全形かな

超神速の抜刀に瞬動、縮地といった超加速を加えて、真速に至り、過負荷であり加負荷である”変速自在”<sup>マイペース</sup>を使い、超真速の抜刀術に至る

恐らく誰でも避けることも、受けることも、見ることも、斬られたと思うことも、出来ないと思う

まあ”必殺”だね

「ああ、あれはヤバかったな」

まあ僕は抜刀じゃなくても、超真速に至ることが出来るけどね

「さ、続きをやるのか？詠春」

詠春は顔をひきつらせながら立ち上がった

とかほざいてから更に5ヶ月

僕の家により、詠春とナギは互いの修行の成果を試すことになった

場所は始めの砂浜

「ナギ、詠春、準備はいいね？」

「ああ勿論」

「いつでもいけるぜクロハ」

力強く頷く2人

「じゃあ……始め！」

瞬間、2人の後ろの砂が爆ぜた

side：サンニンショウ

1日が1年に引き伸ばされる黒羽の別荘内の砂浜

修行の時とは違い、重力には縛られていない詠春とナギの戦いは、普通の人間から見たら何をしているか見えないスピードだろう

ナギは体術、詠春は木刀での剣術

互いの武器が触れ合うたびに辺りは轟音が響く

「えーしゅん、強くなってるじゃねえか!!」

「ナギもな!だが俺としては十歳やそこらのガキには負けられないんだよ!!」

どちらの攻撃も直撃すれば危ない

そんな状況下で2人は無駄口を叩く

拳打と剣撃の嵐

この均衡はすぐに破られる

ナギの右パンチ、詠春は木刀で払わずに右手でナギの右手首を掴む  
そして開いた腹に木刀で一撃、と同時にナギの左パンチが詠春の腹  
に入り互いに吹き飛ぶ

「雷の斧」！」

ナギは吹き飛びながらも詠春に自身の得意な魔法をぶつけた

「へへっ油断大敵だぜえーしゅん！」

雷の斧が直撃した地点は煙が舞い、詠春の姿は見えない

だがナギは雷の斧の手応えを感じていた

だからだろう……ナギが一瞬だけ力を抜いたのは

だがやはり修行は無駄ではなかった

異変を感じたナギは直ぐに体に力を入れ、異変を感じる方を向く

そこにいたのは、木刀に気を注ぎ上段で構えていた詠春だった……

だが一瞬は一瞬……

反応が遅れたナギは……

「九頭龍閃」！！」剣術の基本である、九つの斬撃を神速で一撃  
必殺の元に同時に放つ技

その九つの斬撃を全て喰らい吹っ飛ぶナギ

「悪いなえーしゅん」

「それでもないぞナギ」

吹っ飛んだ先にいるナギは煙を上げながら消え、無傷のナギが詠春の後ろに現れる

それを知っていた詠春は慌てずに、ナギの方を向く

「詠春、どうやって俺の魔法を？」

「黒羽が言うには、”空蝉”というらしい。ナギ、どうやって俺の奥義を？」

「黒羽が言うには、”影分身”っていうらしい」

互いが互いの技を避けた方法は告げずに、避けた技の名前だけを告げる

「にしても詠春すげえな、九つの攻撃を同時に撃つなんて」

「それでもない。ナギもスゴいじゃないか、クレーター出来てるぞ」

詠春の後ろには、ナギの放った魔法により大きなクレーターが出来ている

「それでもないぜ」

雑談は終わり、空気がそう告げていた

そんな中、2人の耳に声が聞こえた

「外していいよ2人とも」

待ってた、といわんばかりに2人は身に着けていた、腕輪と指輪を外す

刹那、抑えられていたナギの魔力、抑えられていた詠春の気が爆発的に上がる

ナギは爆発的に上がった、溢れ出る魔力を右手に集める

詠春はそれを見て、溢れ出る気を全身に纏わせ、気を物質化させ鞘を作り上げ、木刀を鞘へと仕舞う

互いの手札が一枚だけ切られた現状を動かそうとナギは動く

爆発的に上がった魔力で身体強化したナギは一息で詠春を肉薄にする

だが次の瞬間ナギは空に浮いていた

浮き上がったナギの体は、重力に従い下に落ちる

受け身すらとらず砂浜に落ち、肺にある空気を吐き出す

そこでナギは気付いた

ああ俺は攻撃を喰らったんだと……

「これが”超神速の抜刀術”、”天翔龍閃”だ」

詠春は自身の切り札の名前を告げる

その切り札はナギの目にはけっして映らなかった

ナギはダメージを受けた体を必死に動かし、立ち上がる

「やるじゃねえーしゅん、でもな」

今度は詠春が吹き飛ば

詠春が立っていた位置には、ナギがアッパーを放った状態でした

「超神速と”雷速”比べるまでもないぜえーしゅん」

ナギも切り札を切った

そしてナギのこれも完成形だった

闇の魔法とは違う方法で魔法を体に取り込む

魔法とは魔力を担保に精霊の力を借り、発動させる

だがナギは、ある魔宝具により全ての雷の精霊を完全に使役出来るようになった

完全に使役出来るようになったナギは、魔力を使わずに魔法を発動

させる事が出来る、更に魔法を取り込む場合も精霊が体に取り込まれるわけだ

魔力を籠めれば籠めるほど魔法の威力が上がるのは魔力を担保にした分精霊が力を貸してくれるからだ

だが例え無限に近いぐらいある魔力を持っている黒羽でも精霊の力を全て借りるのは無理がある

しかし精霊を完全に使役しているナギは魔力の消費無しに精霊の全ての力を借りることが出来る

「これが魔法の完成形らしい、”精霊魔法”だ」

これがナギの切り札……

「雷速か……超神速じゃあ勝てないよな」

「クロハに教えてもらったけどよ、これ秒速150キロだってよ」

ナギが言葉を紡ぎ終わった瞬間、詠春は再び吹っ飛んでいた

「ぐっ……」

反応すら出来ない、秒速150キロとはそれほど速いのだ

詠春は吹き飛びながらも体制を立て直し、ナギの方を向く

すると詠春の目の前に、雷が走った

刹那、その雷が走った位置にナギが来る

ナギの攻撃をギリギリで避け、牽制に九頭龍閃を放つが……

「なっ……！？」

九頭龍閃による九つの一撃必殺の剣撃はナギの体に当たらず  
すり抜ける

「あ、これもいつてたぜ。この”白き大装”は俺自身が雷になるんだと、よー！」

ナギの蹴りが詠春を捉える

今度は吹き飛ばされずに耐える詠春

「喰らいなえーしゅん、三位一体！」

優勢なナギは更なる切り札を切る

ナギは片手を前に突き出し、自身が扱える三種類魔力を混ぜ合わせる

やがてナギの突き出した手には、手に収まる程度の白い球が出来上がっていた

だが詠春は黙ってみてはいない

急いで距離を開け、三位一体に備える

しかし、詠春は忘れているのだろうか？

今のナギには、距離は一切関係ない

ナギの体が消え、次の瞬間には詠春の目の前に移動していた

そして手を突き出し三位一体を

放った

極太のレーザーといえる三位一体は目の前の詠春を巻き込みながら海の方こうに消えていった

瞬間、詠春がナギの真横に現れた

木刀は既に鞘へと閉まっており、発動する直前だ

「天翔龍閃」！！」

三位一体を撃った後と、やっつけたということでも油断していたナギ

いくら雷速、秒速150キロでも逃げ切れない

だが一切の焦りはない

何故なら、”雷化”

自身は雷と同義、いくら超神速と言っても物理攻撃は効かない

そしてナギの幻想は打ち砕かれ、詠春の奥義がナギに炸裂した

「がはあっ！！」

ナギが吹き飛ぶ

そして詠春の雰囲気が変わる

木刀を仕舞い、抜刀術の構えになる

その動作に一切の焦りはない

そして詠春はその場から姿が消え、詠春の後ろの砂が大きく爆ぜた

詠春は一瞬、たった一瞬だが雷速を越える”真速”の域に至った

## 第十四戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第十四戦でした

いやぁチートすぎますね精霊魔法WW

そして真速の一撃、どうなるのか？

次戦で決着！

では次戦は第十五戦です！

## 第十五戦（前書き）

大変更新が遅れすいませんでした!!

作者は只今夏休みの宿題の開始しているところなのでかなり更新が遅れております

夏休み中は更新が遅れますがご容赦を……

さて今回はとうとう（あっけなく）決着がつきます

そしてクロハの……

では第十五戦です。どうぞ！

## 第十五戦

最後の切り札を切った詠春

それはズバリ神速を越える超神速を越える雷速を越える真速

真速に至った詠春は、一瞬でナギに追いつく

ナギはナギで詠春が来たことに気づいていない

「龍牙・絶衝」

詠春は抜刀し、自身が放つ最高の一撃をナギに浴びせた

side:クロハ

あー漸く終わったね

にしても分身のほうの僕も良くやったよね

三位一体よりよっぽど凄いのを覚えさせるなんて

でもまあ、詠春の勝ちだね

あれから既に別荘の中では1日経ってる

2人とも出し切ったらしくコテンとあの後倒れてしまった

というか2人とも倒れてるから僕やることやった後（鍛錬と研究）  
暇なんだよね

この世界から平穩を無かったことにしてやるのか、とか最近よく思う

あ、これも最近なんだけど                    だんだん狂化に呑み込まれてる  
僕がいる

やばいなあゝ、そろそろこの加負荷じゃない過負荷をどうにかしな  
いと行けないんだけど……

てか今気づいたんだけど、僕別に過負荷の塊じゃないよね？

いやだってさ、過負荷の塊なのって狂化を扱えるもう一人の僕じゃ  
ん？

てことは狂化を完全に扱えて初めて過負荷になれるの僕？

じゃあ今の僕って少し加負荷気味のチートな少女？

いやいやまって、なんか色々と発展して訳が分からなくなったよ？

でもまあその内頑張ればいいかなあ

僕の計画には制限の付いた大嘘憑きじゃ駄目だからね

………神ごときが僕を縛れると思うなよ

「なにしてんだ？クロハ」

お、この声はナギかな

「ううちょっと考え事してんたんだよ」

「そっか、えーしゅんも直に目え覚ますから飯頼んでいいか？」

計画についてはまた今度だね

「分かったよ、それとナギ」

「ん？」

「カッコ良かったぜ」

「……………お、おう／＼／」

さて飯作りに行きますか

料理なう

簡単にパスタとかかな

~~~~~

「よし、完成」

僕がパスタを作り終わると同時に、ナギと詠春がやってきた

「パスタか…………」

「手作り……ハアハア」

うんちよつと危ないのがいたね

まあナギだから大丈夫かな？

「じゃあ食べよっか」

そうして昼飯はみんなで楽しく食べましたとさ

「今からどうする？」

食い終わったナギは僕らに問いかける

「海が近場だから海で遊ぶ？」

僕がそう提案すると、ナギは激しく頷き、詠春はそんなナギを見ながら苦笑気味に頷いた

「よーしけつて〜！」

「覗いちゃ駄目だからね？」

一言釘を差してから僕は更衣室に入る

なんでつて？当然水着に着替える為さ

更衣室はね……空き部屋の隅っこに作ったよ

ま、どこに作るうが……

着替える前に僕は更衣室のカーテンを開ける

「あ」

カーテンを開けた先には想像通りナギ

「燃える天空”、”千の雷”、”えいえんのひょうが”、”龍牙・絶衝”」

あ、もちろんナギにしか及ばないように結界貼ったよ？

「！！！！！！」

ナギは声を上げるまもなく死んだ

「はあやつと着替えれるね」

再び更衣室に入り、今度こそ服を脱ぐ

そして脱いだ姿で鏡を見る

「うんやっぱりもう少し成長させたほうが……。胸とか、身長とか……」

そついいながら僕は自分のぺったんこな部分を触る

「今のボディは大体小学六年生ぐらいだからな、ぺったんこもしょうがないかな？」

悩みながら水着に着替える

どんなのかって？各自のご想像にお任せしまーす

着替え終わりカーテンを開くとナギが死んでた

「なんで死んで　僕が殺したんだった」

取り敢えずナギは　放置しよう

ナギを放置した僕は海まで転移する

景色はいっぺんに変わり海へ

既に詠春がいて、パラソルの下に椅子置いて座ってた

「や、詠春」

詠春に声を掛けると詠春がこちらに気付いた

「あれナギは？」

そんな詠春の反応に僕はムツとする

「ナギなら殺したよ。詠春、女の子が水着を着てきたんだから最初は似合ってるね、とかあるだろ」

「いや、そんなロリボディ……」

僕は無言で、無刀・罪を取り出し詠春に向けた

「に興味ありまくりナンデスヨネー。大変似合ってるオリマスヨ」

多少へんな感じはしたけど許してやるかな

「あーいてて……」

と、ナギ登場

「や、ナギ」

「お、おうクロハ……そ、その似合ってるぞ／＼」

その言葉を聞き、僕は詠春を見た

「悪かったな！」

こちらを見た詠春は半ばやけくそに叫んだ

「さてじゃあナギ！遊ぼうか！」

「おう！」

「俺は入ってないんかい！」

それから夜まで遊び倒した……

## 第十五戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

という訳で第十五戦でした

さて詠春がナギに勝ってしまいました

まあ年上の威厳を見せつけたのかも？

そして海！

いいですね私も少し前に海に現実逃避してきたところですよ

おかげで日焼けでヒリヒリしますが……

さてでは今回登場した刀”無刀・罪”の説明をしましょう

一見はただの刀ですが、これは斬ったモノが存在ごと消えるというチート極まりない代物でございます

つまりは斬れるものなら、人間だろうが、魔法だろうが、詠春のメガネだろうが消えてしまいます

ちなみに死なないように設定してある黒羽の別荘で斬られても消えます

死ぬ訳じゃないんで、別荘の不殺傷関係ありません

そして詠春……ロリボディに興味ありまくりとはww

とんだ変態メガネですねww

というか神鳴流って変態ばっかですね

おぜうさま命、ムツツリスケベ、ロリコン眼鏡、なんか斬りあって  
感じるDM

とまああとがきばかり長くなりますね

ではいきなりですが少し赤き翼編、ラスト予告を次回にしたいと思  
います

恐らく誰も思いつかないようなラストなので楽しみにして  
いてください

あ、どんなラストか予想を感想に書いてみてください

様々なラストを期待しています

あ、ラストというのはライフメーカー撃破後です！

ヒントは錬金術です

では次戦は第十六戦です！

## 第十六戦（前書き）

今回はあるキャラたちとの遭遇エンカウンター話です

まあロリコンとジジイは当たり前ですね

ですが！さらにもう一人と出会います

そんな第十六戦です！

## 第十六戦

「あんだあテメエは？」

やあみんな、魔法世界に来て色々頑張ってる黒羽だよ

そんな僕たちはとある森を過ぎる際に一人のロープを着た男と、小さい子供が目に入ったんだ

そしたらナギが助けるっていつて飛び出して行っちゃったんだよ

はあ大丈夫だと思うけどね、あの二人なら……

そんな訳でナギが飛び出したから僕達も当然見つかり、冒頭へ……  
つて訳さ

「俺はナギ・スプリングフィールドだ！数にモノ言わせやがって！  
！」

あの二人　分かってると思うけど、アルとゼクトに絡んでる男  
達の人数は八人ぐらい

まあ勝てないよね……八人じゃ

「んだこのガキは？」

男の一人が不用意にナギに近づき……ぶっ飛ばされた

「後七人！」

ナギが駆け出して、瞬く間に男達をのしていく

そして最後の一人も

「おらぁ！」

「がふっ！！！」

終わった……

「はぁすつきりしたぁ！！！」

さてじゃあアル達との会話と行くかな？

「大丈夫でしたか？」

アルに声を掛けると、アルはロープの中で薄く微笑んだ

「幼女ですか？」

「はい、幼女です！」

バカだ……。そして僕もバカだった……

あの後自己紹介をさっさと終了させて五人で行動中

「んでクロハ？魔法世界に来て結構経つけどさ、俺たちどこ目指してんだ？」

「うーんどうしようかな？もう『完全なる世界』って行動開始してんのかな？」

「どこに行くにしても、ヘラスとメセンブリーナは止めたほうがいいですね」

「そうじゃな、対立しとると聞いとるし」

なるほど……。既に『完全なる世界』は動いていると……

「じゃあメセンブリーナに行ってヘラス行ってメセンブリーナ行くっか？」

「ずいぶんとめんどくさいルートだな」

詠春はめんどくさそうに呟く

「アルとゼクトはどうする？付いてくる？」

「フツツ幼女がいるところどこまでも、ですよ」

「アルよ、クロハにあってロリコンが悪化したらんか？まあ儂も付いて行くかの。行くところも別にないしの」

というわけで

『アルとゼクトが仲間になった!』

さて目指すはメセンブリーナ……だっけ？

とかほざいたことを後悔した黒羽です

うんなんていうかね、遠いねメセンブリーナ

アルとゼクトを仲間に加えてメセンブリーナ目指してるんだけど全くつかない

というわけで今は近くの街に立ち寄っている状況だね

「まずは宿を決めようか」

街に入って少し大きめの宿に入り部屋割りを決める

当然僕、詠春とナギ、アルとゼクトの三部屋になる

ナギとアルが残念そうにしてたけど知るもんか

「さて次はどうしようか？」

宿から出て暇を持て余す僕達

「何か向こうの方が騒がしくないか？」

「そついやぁそつだな」

「向こうは確か広場でしたね」

「行く？」

「おう！」

僕の問いにナギが頷き、僕達は広場へと向かった

「何かあつたんですか？」

近くにいたおじさんに聞いてみると……

「ああ、どうやらこの近くの森に古龍種が来たらしくてな。森を通る奴らが困ってたんだよ」

なるほどね、確かに龍種、しかも古龍種じゃ見つかった瞬間死んじやうもんね

「さてみんなどうする？」

一番に声を上げたのは意外にもゼクトだった

「どつするもこつするも、儂らも森を通らなければメセンブリーナには行かれんじゃろ？」

「そうだね、じゃあとつとと行きますか」

というわけで僕ら一行は古龍種がいる森へと走り出した

森に入ると確かに古龍種の魔力は確認出来たけど……

「もう一つありますね」

アルの言うとおり古龍種の近くにもう一つの魔力を感じる

かなりの使い手ってことは分かる

「急ごう黒羽！相手は龍種だ！」

確かにそうだね……

「じゃあ飛ばすよー！！」

僕は足に魔力を溜め、爆発させた

結果僕が一番始めに古龍種に辿り着いた

そう辿り着いたのはいいんだけど……

「古龍種とドンパチやってるのがまさか……エヴァとは誰も思わないよね」

金髪幼女と殺戮人形が普通に古龍種と戦ってる……シユールだ

しかもあの古龍種……ナズチエ

「何でいるんだよお……」

その時エヴァと古龍種が僕に気付いた

「おいガキ、こんなところで何をしている！？早く逃げろ！」

エヴァが僕に向かって何か叫んでいるが、古龍種の暴れまわる音で聞こえない

そしてナズチがこちらに毒を吐いてきた

ていつかナギ達はまだ来ないのかよ……全く

「従者召喚『ナギ・スプリングフィールド』」

毒が迫ってくる前にナギを召喚してやった

「うおっ！？何だ？」

毒に気付いていないナギ

このままだったら確実に被弾するね

え？助けなかったのかって？なんでさこんなに楽しいのにw

その時横から毒に氷の矢が何本も刺さり毒の軌道はナギから地面に

変わった

「お前は何を考えてるんだ!?!」

エヴァが叫ぶ

「何って……主を助けにこない従者を召喚しただけだけど?」

「?」

ナギは訳の分からない顔をしている

まあそりゃそうだよな……

「ワザとだよな!?!」

「うん」

満面の笑みで頷く

「はぁ……もういい」

エヴァは何かを諦めたかのような顔をし、ナズチの方を向くが驚愕する

「なっ!?!どこに行きおつた?」

「御主人ガアホナ事シテル間ニニゲタンジャーネーカ?」

エヴァの上から人形が一体落ちてくる

そしてその人形、チャチャゼロはエヴァの肩に座った

「私のせいなのか!？」

「あいつらなんだクロハ？」

とここでようやく放置気味だったナギが口を開く

「不死の子猫と殺戮人形だよ。一般的には闇の福音で通ってるのかな？」

僕がその名を出すと、エヴァとチャチャゼロの言い争いが止まりこちらを睨んでくる

「貴様等何者だ」

「ケケケ御主人ノ敵力？」

というか……

「それに答えるのは……」

僕は無詠唱で魔法の射手を二百ほど奴目掛けて放つ

「この古龍種を倒してからでいいかい？」

ナズチに直撃するとナズチは大きくのけぞる

でも流石古龍種だね

僕の魔法の射手を喰らって大したダメージが与えられないなんて……

確かナズチって透明化状態だめっちゃ硬くなるんだっけ？

ナギは既に三位一体に入っており、エヴァも詠唱を始める

つまり僕が前衛か……

「はあ……」

僕は溶刀を取り出し（暗器術で）中段に構え、透明化して気配を絶っているナズチに斬りかかる

恐らくナギとエヴァはいまナズチがどこにいるかわかってない

だから取り敢えずナギ達に分からせるようにマーキングをつける

一撃…… ナズチを一回だけ斬る

「……………！！！！！！」

バインドボイス？を上げるナズチ

「うるさいな。僕が近くにいるんだから黙ってるよ」

二撃……三撃と斬りつけていき距離をとる

といつか溶かすことを概念としている溶刀で斬ることになるなんて

……

瞬間ナズチに直撃するナギの三位一体、そしてエヴァによるえいえんのひょうが

「終わりだよ。”天極・連”」

目にも止まらない超真速による九頭龍閃

それを連続で叩き込む

ナズチはどんどん弱っていき最後には絶命した

「なんだあの刀は……。それに剣速が普通ではない」

「おいおい闇の福音、クロハの最高剣速はもつと速いぜ?」

「なっ!? ありえん……。アイツ本当に人か……」

「人だよ。壊れてるけどね……」

ナギ達の会話に入り込む

「クロハ、それでこのガキは?」

「誰かがキだ! 貴様もまだまだガキではないか!」

「ナギ〜一応訂正というか言っておくけどその幼女は真祖の吸血鬼で六百歳を越えていてエターナルロリという称号を得ているんだよ」

「ええい貴様の紹介も訂正だ! 幼女ではないしエターナルロリとや





ゼ「」

ナ「……………」

僕「……………フッ」

~~~~~

ナ「姫さん！どういづことだよ！」

ア「ここ、オスティアはまもなく崩壊する……………」

僕「ハロハロー」

ナ「クロハ！？今までどこに？」

僕「少し準備をね。アリカ姫、少しいいですか？」

ア「なんじゃ？」

僕「今回のオスティア崩壊を全て無かったことに出来る、といったらどうします？」

ア「なに！？」

ナ「そうか！クロハの大嘘憑きなら無かったことに出来る！」

ア「本当に出来るのか？クロハよ」

僕「問題ありません。一秒で終わります。だが！一つだけ条件があ

ります」

ア「言ってみよ」

「この魔法世界の総人口の三分の一を貰いたい」

全員「な…なに!？」

~~~~~

「お前か？こんなバカなことして門を開いたのは」

「君が真理か……」

「いかにも！さてお前は何を代償に！何を望むんだ！？あるものは母を望み、代価として弟の魂を失い、あるものは子供を望み、子宮を持って行かれた。さあ！お前は何を望む？」

「すべてを……望む」

【予告END】

まあこんな感じですかね？

では次戦は第一七戦です！

## 第十七戦（前書き）

えー今回はいつもよりも一層駄文な上、話が飛び飛びです

よくわからないと思いますが原作にとっとなんか行きたい表れだと思っ  
て下さい

そんな第十七戦です！どうぞ！

## 第十七戦

「キングクリムゾン！」

僕はありったけの音量で叫ぶ

「何いってんだクロハ？」

「アイツのアホっぷりは前からだろ」

「そうですよナギ」

「アホだな（アホダナ）」

「アホじゃな」

上からナギ、詠春、アル、エヴァりんとゼロりん、そしてゼクト

こやつらは敵じゃー！

…………… まあそんな事は置いといて

時間は飛んで、メセンブリーナに寄ってヘラスにも寄った俺達は互いの戦況を把握し、メセンブリーナ側についた

そして今はみんなで鍋パをしてる

まあ賢い読者のみんなならお分かりの通りあの筋肉達磨の登場だろ  
うね

さっきからデカイ気が近付いてきてるし……

「クロハ食わんのか？」

僕が読者へ説明してる間に鍋の中の肉などがごっそり消えていた

主にナギとゼクト、エヴァが占領してやがってた

「ナギ、あーん」

ナギを呼び、口を開ける

「く、クロハ？」

ナギが少しキョドる

「は、早くして。やってみて分かったけど恥ずかしいんだからさ／＼」

「お、おう／＼」

ナギは皿から肉を箸で掴み僕の口へ運んでくれる

僕の口に入ってきた肉を噛み味を味わう

「どうだクロハ？」

「うん、美味しい」

「お前ら本当に十四歳か？」

僕は六百越えてまーすw

「で、確か”悠久の風”はなんていったっけ？」

「偵察でしたか？」

「そうじゃ」

悠久の風ってのは原作でナギたちが入っていたメセンブリーナの所属部署の事だよ

確かタカミチとガトウがいた気がするけどね

え？エヴァはどうしたかって？

そんなの簡単さ、エヴァの罪を無かったことに　　したかったんだけどエヴァが止めるっていったから認識障害を使ったよ

……………っていつか来たね、達磨が

ドカーン！と爆音を響かせ馬鹿でかい剣が地面に突き刺さり鍋が宙を舞う

「食事中失礼~~~~ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！  
いっちょやろっぜッ！」

ふむ、気の練度はそれなりだけどまだまだ甘いね

僕だったらさっきのセリフの間にラカンを二回は殺せてたね

取り敢えず鍋を頭から被った詠春が間抜けすぎたから笑っておこうかな？

「フフフ……。食べ物を粗末にする奴は……」

詠春が瞬動でラカンの下に移動する

この場面は重要だね。このチート化した二人に”修正力”がどう関わってくるのかが……ね

「はああああ……”九頭龍閃”！！」

「うおっ！！」

……やっぱり上方修正されてたか

ラカンが九頭龍閃を”全て”防いだ

あのナギでさえ無理なのに……

ま、僕からすれば後の事は原作通りだからつまんなかったけどね

まあこつからも対して変わりはないんだけどね……

ヘラスとメセンブリーナの全面戦争が始まり出して、有名な”グレードブリッジ奪還作戦”で戦況は一気にこちらへ有利に傾いた

そして説明途中に余談だけど僕らのファンクラブが出来たり、僕の成長が止まったり、ガトウやタカミチと出会ったりもした

それでとうとう動き回っていた”完全なる世界”の存在が明らかになつた

そして今はアリカ王女と対談している

「何見とれてんだ！」

ポーンとアリカ王女の事を見ていたナギの耳を引っ張る

「いて！いてえよクロハ！」

「ふん！」

「おほ（ハート）」

それからナギがアリカ王女と楽しそうに喋り、それを僕が半目で睨み付けながら対談が終わるまでエヴァと喋っていた

エヴァの件は流石にもう無理なんで変装させたよ

そして対談終了……

「なあクロハ」

「ふーん」

「何でそんなに怒ってんだよ？」

「ナギなんかもう知らない」

「はあ、意味わかんねえよ……」

「だからつまりだなナギ、クロハはあの女にやきも……」

「死ね、糞達磨」

僕はアホなことを口走ろうとした達磨にフルマを放つ

「あは、ばばばば」

取り敢えず達磨は焦げた

「????」

その場には冷や汗を流すメガネ、ロリコン、エタロリ、シヨタ爺

ハテナを浮かべる鳥頭

焦げてる糞達磨

最高密度の魔力を放っている僕

この濃い魔力密度の性で動き回りまくっている殺戮人形というカオスな状態が出来上がった

閑話休題……

それでとうとうナギがアリカ王女を連れ回している時に潰した下部組織からなんと重要な証拠を見つけたらしく更に事態は急展開を迎えた

「法務官は来られぬ事となった……」

「あ、そうですか。それじゃ」

僕は踵を返し、デコハゲ……もといマクギル……もといフェイトの下を去ろうとする

「いやまてまて……」

がしかしガトウに止められてしまった

はっきり言うと僕は今すっごく眠たい

だってもうよい子は寝る時間だよ？

しかもなんで僕がついて行かなくちゃいけないのか理解できないよ

「ていうわけで早くしろよ糞人形？」

「はっ？誰に言っただクロハ？」

ナギ、ガトウ、ラカンが一斉に首を傾げる

「ナギは薄々気付いてるでしょ？このデコハゲが本物じゃないってことぐらい……」

もう魔力の質、密度、量からして全く違うし……

「ああ確かにな」

「なるほどね。これはまだまだ改良が必要なようだね」

そう言っただコハゲの変装を解き姿を現すフェイト

ま、というわけで僕たちは無事に犯罪者への仲間入りを果たしましたとさ

## 第十七戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

というわけで第十七戦でした！

まあ今回は飛びまくりだったのであまり面白く無かったと思います

原作に関しては後五話ぐらいで行く予定なので……

ああ文才が欲しい……

次戦は第十八戦です！

## 第十八戦（前書き）

今回は自分で書いてても良く分からなくなってしまうました

つまり駄文の二乗ということですよ

少し悲しいかもしれませんが……

というか悲しいようにしたかったんですが……文才のなさによりうまく表現出来たか分かりません

一応あとがきで補足はするつもりですが……

それでは第十八戦、どうぞ！

## 第十八戦

「何だこれが噂の赤き翼の秘密基地か！どんな所かと思えば…掘立小屋ではないか！」

テオが僕たちの秘密基地を見て少々がっかりしたような声を出す

「いやていつか秘密基地だからね？豪華だったら秘密基地の意味ないからね？」

「俺ら（僕ら）逃亡者に何期待してたんだ（してるんだよ）このジャリ（チビ）はよ」「

「ん？何だ貴様ら無礼であろう！後そのチビ！おまえよりは小さいわ！」

「なっ……僕よりエヴァりんの方が小さいよ！」

「何故そこで私が出て来るんだ！？」

「言い返せなかったから」

「だからって私に当たるな！」

「ってコラ！その二人！私を無視するな！」

「何やら幼女三人騒がしいですね」

「アル、おまえ涎出てんぞ」

ラカンが指摘するとアルは冷静に口元を拭いながらも視線は幼女三人から外れない

僕達がギヤアギヤア騒いでいるとナギの―際大きい声が聞こえ、みんながそちらを見るが、僕はそつちを見なかった

(やっぱり原作には勝てないんだね。せつかくの だったのになあ。やっぱり結ばれちゃうんだよね、あの二人は……)

「おい大丈夫かクロ…ハ？」

「『うん、大丈夫だよ』」

エヴァに今の気持ちを悟られたくない僕は虚勢をはり、括弧をつける分かってた。こうなることは……

「クロハ……お前」

「『しょうがないよ、そういう物語なんだから。この御話は……』」  
分かってたのに……

自分の気持ちを最大限押し殺す

どのみち実らない なんだ

「お前は本当に不器用だな、クロハ」

「『そうだね。あらかじめ言っておくと僕はこの結末を知ってたんだよ』」

「な！……不器用にも程があるぞ」

「『でもさ……になっちゃったものは仕方くない？』」

でもこっちのほうが良かったかもしれない

どのみちなぎは計画に賛成してはくれないだろう

となると阻止するために動き出すかもしれない

計画の過程で好きな人を殺しちゃうってどんなだよ……

だったらこんな恋愛感情は……

「結ばれないことは分かっているもか？愚かだな」

僕はエヴァの返答に苦笑していると……

「いいぜ！俺の杖と翼、あんたに預けよう！」

ナギの声が聞こえた

「『あーあ。ふられちゃった』」

それと同時にある感情が高ぶってくる

「『ねえエヴァ』」

「何だ」

「『少しだけ……甘えていいかな?』」

「……ふん。やはりお前も人間だったと言うわけか」エヴァはナギたちの方向に向かう

「ナギ、私とクロハは先に行っておくぞ。後一時間は絶対に入ってくるなよ。入ってきたら順番に皆殺しだ」

エヴァ、それじゃあ順番関係ないよ……と思った瞬間僕の体は浮遊感を感じ、いつのまにか秘密基地の中に入っていた

そして横にはエヴァがおり、少々顔を赤らめていた

「ふん。少しだけなら甘えても構わん、だが少しだけだぞ!」

その言葉に僕の涙腺は一気に崩壊し、エヴァに寄りかかり自分の気持ちを吐き出した

エヴァはそんな僕を抱きしめて背中をずつとさすってくれた

一方奴ら……

アルside

おや私に回ってきましたか?それではまず、ロリの素晴らしいところを三日三晩……語るのは今度にしましょうか

今しがた離れていたエヴァがこちらに来て、クロハと先に休むと言  
って転移していったばかりですね

少し怪しく思い、私は基地に少し近寄ると誰かの泣き声が聞こえて  
来ました

私はそれで察し、防音の結界を基地に張ってナギたちの元へと戻り  
ました

みんなエヴァのセリフに首を傾げ、訳が分からないといった風にな  
っていたので私はその光景に少々笑ってしまいました

その様子を見て、どういう意味かナギが聞いてきたのであの子の気  
持ちも考え取り敢えずナギを殴っておきました

ま、その様子を見て周りが更に首を傾げたのは言うまでもありませ  
んが……

アルside END

エヴァside

全く、本当に人間とは厄介だな……と私の腕の中で寝てしまったク  
ロハを見て思う

私は初めてクロハを見たときは、本当に驚いた

人間ではない……と感じたからだ

姿形は人間だが、辺りを取り巻く気や魔力のようなものが禍々しす

ぎた

まるで私ですら霞むぐらいに……

後にクロハに聞いてみると、自分ではなく自分の体の中に飼っているモノがそうらしい

だんだん自分では抑えが効かなくなっていつているらしく、時たま戦闘でおかしな力を使うのはソイツが原因らしい

まあソイツを抑える術は既<sup>すべ</sup>にあるらしいから問題ないらしい

ま、そんな人外みたいなコイツにも人間らしいところがあった…と  
いうところだな

「うう……ん」

私の腕の中でクロハが体をよじる

確かに腕も疲れてきたし、ベッドに寝かしておくか

部屋に移動し、ベッドに寝かせようとするが…

「おいクロハ、手を離せ」

私の服から手を離そうとしない

「やっぱりまだまだガキだな、コイツも」

「う…ん。エ……ヴァ」

さっきまでワンワン泣いていた奴が満足そうに寝よって……

「えへへ……」

「……っ／＼／」

……可愛いじゃないか

それからクロハに少し悪戯したあと私は部屋を去った

クロハ side

「うう……」

気がつくと僕はベッドで寝ていた

「あれ僕……そうだった」

確かエヴァに泣き……じゃなかった、甘えてた筈だったんだけど

その時、部屋の扉が開きエヴァが食事を持って現れた

「おっ目が覚めたか」

そう言ってベッドの近くにあったミニテーブルの上に食事を置く

「随分ワンワンと泣い……」

「泣いてないっ!」

「はあ…少しぐらい素直になれんのか？」

「泣いてない、甘えてただけだ」

「もういい……。それで踏ん切りはついたのか？」

踏ん切り？……ああ

「『うん大丈夫だよ。もし計画を邪魔しようものなら殺す覚悟は出てくるから』」

「計…画？」

「『うん。最終決戦の後、約二千万人の命を僕は無慈悲にそして、無情に非情に奪うんだ』」僕の計画を聞いてエヴァは、驚愕し、愕然し、呆然とする

「ど、どういうこと……だ？」

エヴァがやっと絞り出した声量はひどく小さかった

「『それは理由を聞いているのかい？それとも内容について聞いているのかい？でもまあ時がくれば分かることだから今は言わないけどね』」

そして僕は驚愕しているエヴァをよそに持ってきてもらったご飯を食べる

「『あ、美味しい……』」

## 第十八戦（後書き）

どうも鳳凰員 凶真です

というわけで第十八戦でした！

今回の話は訳が分からなかったと思います

自分も訳が分かりませんw

でもまあつまりクロハは今回のことでナギを諦めた……ということ  
です

まあクロハ自身も原作の流れは変えられないと、考えているからで  
しょう

それでもナギに恋をしてしまったクロハは少し可哀想でしたね……

愛し合えないと分かっているのに好きになってしまつ……昼ドラか  
！ってな感じですよねえ

ま、そんな感じですよ！

分かりにくい方、すいません。各自で納得してください

作者の文才ではこれが精一杯です

それでは次戦は第十九戦です！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8777u/>

---

黒羽の歩む道～inネギま！

2011年9月27日16時05分発行